

した見込に鳥と樹木を染付けしている。疊付から高台内をのぞいて青磁風釉を総掛けしている。砂の付着が認められる。同意匠に18があるが、高台内を施釉している点で異なる。16は見込に宝文を染付ける。17は菊花形皿で型打ち成形である。二重圈線の見込には宝文を染付け、高台外面に下方の半円文を染付ける。疊付を除いて青磁風釉を掛けている。19は口縁部内外に二重圈線を、また内面は二重圈線を境に見込に染付け、体部に花卉文を染付ける。碗の可能性もある。

青花碗（20～26）

20は陶胎で見込み二重圈線を引き、蘭様文を染付けている。21は外面に唐草風文を、22は草花文を染付ける。23、24は法量が若干異なるが饅頭心碗である。23は内面見込に鳥と思われる文様を染付けし、高台内には「長（ ）佳（ ）」銘を配す。24は見込に宝文を、また高台外面に二重の円環繫文を染付ける。25は内外面胴部に花卉文を配す。内面の文様右端に直線文を引くことから、29類似の小鉢かとも思われる。26は型打ち成形で、口唇部を輪花形とするが、先端部を欠損する。内面に唐草風陽刻文を、外面は波涛文、飛馬文を染付ける。

青花小碗（27、28）

27は饅頭心状の底部の作りで、ともに相似た法量、形状を見せる。口縁内外面に圈線を引き、体部は無文。見込に円文を配す。釉薬の発色が悪く青灰色を呈す。

青花小鉢（29）

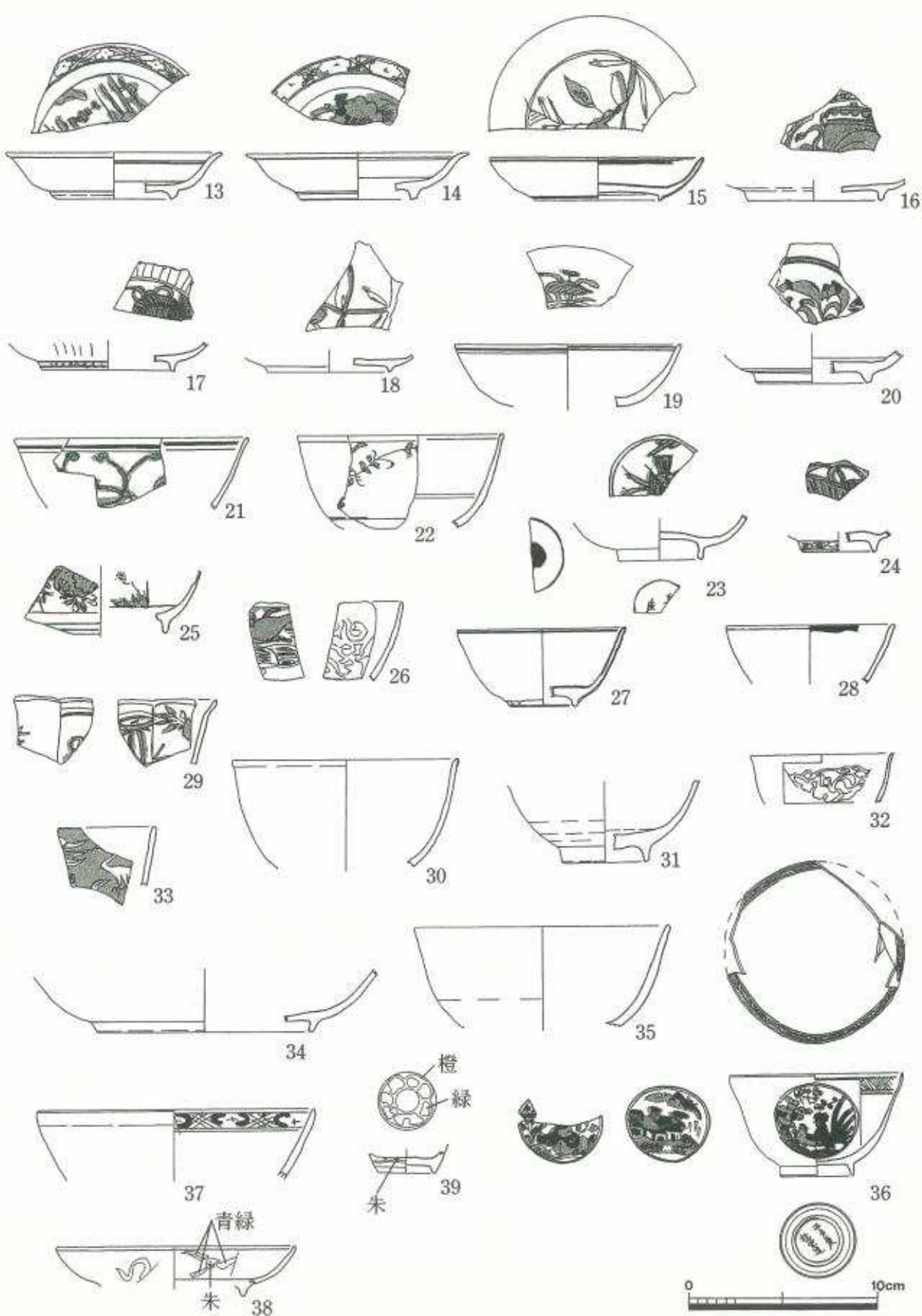
型打ち成形によって側面に区画部を設け、口唇部を輪花形に成形している。内面窓内に花卉文であろうか染付けし、窓間の区画部には紐結び状の瓔珞文を染付け、外面には窓内に花卉文、区画部に紐結び状の瓔珞文を配している。25は底部資料で内外面ともに圈線上に花卉文が染付され、また高台外には二重圈線を全周させており、24などと接合するものであろう。

白磁皿（12、34）

12は、8～10より一回り小さい輪花形皿で型打ち成形によって文様を陽刻する。口縁部から垂下して左走する蔓状文に、変形した如意頭文が繋がり、さらに見込部の円環部に収束する文様構成になっている。これらが文様の一単位となり、8単位の文様で全周させている。釉薬は透明釉で疊付を除いて総掛けする。高台内は放射状のケズリ痕が残る。34は薄く精巧な作行きの中形皿で、高台脇から伸びやかに外反する様相を見せる。釉薬は透明の輝度の高いもので、質感は30に近似する。

白磁碗（30～32）

30は上質で輝度の高い釉薬を用いており、しっとりとした肌合いをもつ。直に延びあがった口縁部の外面に釉薬を厚めに掛けて小さな玉縁を見せてている。31は底部の資料で高台から急角



第22図 磁器実測図② (S-1/3)

度で延びあがる体部を見せる。高台脇に僅かにケズリ痕を看取できる。釉薬は透明で厚く総掛けしている。

白磁小壺 (32)

型打ち成形によって内面に牡丹唐草風の文様を陽刻した非常に薄作りの優品である。口縁部は僅かに端反りしている。

褐地白花碗 (33)

外面に褐釉を掛け、鶴文を白土で体部を、呉須(?)でくちばしと足先を描いた資料である。内面は失透の釉薬を掛けている。口唇は平坦に収める。

青磁碗 (35)

体部から緩やかに延びあがる口縁部資料でロクロ痕が明瞭に看取できる。胎土は白磁碗のものと同様である。釉薬は薄い青緑風の青磁釉が白磁碗と同じような厚さで掛かっている。

彩色磁器 (37~39)

3点確認された。38はD-2石だまりから出土した皿である。口縁部内外と見込際に圈線を染付けし、その後内面は、花卉文の葉は輪郭を黒で線描きし、花は朱で葉は青緑で釉彩している。外面は龍雲文であろうか緩やかな曲線を朱で上絵付している。彩色瓷器または豆彩と称される類であろう。37はB-3Ⅲ層出土の資料で、彩色はなされていないが、井手平城跡出土遺物の例からその可能性があるためあえて掲載したものである。復元口径148mmのやや大振りの碗で、口縁部内面のみに四方擗文を染付る。39はD-7Ⅲ層出土の碁笥底の小鉢で見込に蛇の目剥ぎをおこない、花文を緑の釉薬で、その周囲を朱で縁取上絵付けし、外面は朱で上絵付けする文様不明の資料がある。その他、大皿の見込に朱と緑を上絵付けした文様不明の資料がある。

伊万里皿 (11)

内面に窓枠を数箇所配し、窓内に松文、笹文、草花文を交互に染付するようで、見込み中央に花卉文を配する。外面には圈線を三重に全周させ、高台内に文字のくずれであろうか不明文様を書く。置付けを除いて総掛けしており、高台内にハリ支えの目跡を1箇所残す。

三川内小碗 (36)

非常に薄作りで、内面口縁部に斜行線文を、外面4箇所に丸窓を配し鶴、風景文などを転写する。高台内に「平戸産 枝栄造」を転写。同種の資料は外に盃、端反小碗などがある。

揮 圖	番 号	出土地点・番号	種別	器形	口径	高さ	高台 径	成形	文				様				施 釉	施 高 台	刻 印	高 台	内 外	豊付 耐				
									口縁部	体	外 部	口 縁 部	内 部	面	面											
21	1	B1溝32	青花	鉢皿	27.6				二重縁線			窓内花卉文外向背海波文	無	不明												
21	2	D1溝8	青花	鉢皿					二重縁線			窓内花卉文外向背海波文	無	不明												
21	3	B3Ⅲ	青花	鉢皿	26				圓線			窓内花卉文外向背海波文	無	不明												
21	4	B1溝13+D2Ⅲ1	青花	鉢皿					二重縁線	圓線		窓内花卉文外向背海波文	變文	不明												
21	5	B1溝7	青花	鉢皿					二重縁線	圓線		窓内花卉文外向背海波文	鳥文、竹文	不明												
21	6	B3Ⅲ	青花	幾手類	34.4				二重縁線	圓線		花卉文、墨繫要略文	不明													
21	7	D2-4	青花	中型皿		11.4						垣文														
21	8	B1溝1	青花	輪花形皿	14	3	8.8	割打		圓線		如意西陽刻文														
21	9	B1溝36	青花	輪花形皿	13.8	3.4	8.6	割打		圓線		如意強陽刻文														
21	10	東北18+25+27+35	青花	輪花形皿	14	3.6	8.5	割打		二重縁線		如意頑陽刻文														
21	11	A2Ⅰ	精雕万里	皿		11.4			圓線			窓内山水文	年款、圈線													
21	12	B3	白磁	輪花形皿	13.2	2.7	5.4	割打		圓線		変形如意強文陽刻														
22	13	D1溝2	青花	皿	11.6	2.5	6.2	割打		圓線		山水樓閣文														
22	14	B1溝4	青花	皿	12	2.5	6.2	割打		圓線		山水樓閣文														
22	15	D2Ⅲ	青花	皿	11.4	2.3	6.6	割打		圓線		鳥文、樹木文														
22	16	B1溝21	青花	皿		7						宝文														
22	17	D1溝3	青花	葵花形皿		7						宝文														
22	18	C6Ⅳ	青花	皿		6.5						鳥文、樹木文														
22	19	D1溝11	青花	内湾皿	12							花卉文(?)	不明													
22	20	B-1-C3	青花	皿or碗		6.2			二重縁線			二重縁線+勧祥文														
22	21	D1溝1+溝壁	青花	碗	12.4				圓線			草葉文+圓線														
22	22	D1溝7	青花	碗	11				圓線			草葉文+圓線														
22	23	B-1-C9	青花	觸頭心碗		4.6						二重縁線+鳥文(?)	外:二重円環繁文													
22	24	B-1-B15	青花	觸頭心碗		4						花卉文+圓線														
22	25	B1溝34	青花	碗								背景風陽刻														
22	26	B1溝14	青花	輪底刻碗								圓線	圓線+円文													
22	27	B-1-C11	青花	小碗	9	4.2	3.6	割打		圓線		圓線														
22	28	B1溝28	青花	小碗	9				圓線			牡丹唐草風陽刻文														
22	29	B1溝5	青花	小鉢	12				割打			割打+植物紋														
22	30	D1溝4+5	白磁	碗		4.8						鶴文														
22	31	D1溝14	白磁	碗																						
22	32	D1溝17	白磁	碗	7.6																					
22	33	D2-3	施地白花瓈器	碗																						
22	34	B1溝25	白磁	中型皿		11.6																				
22	35	表様		青磁		13.6																				
22	36	A8溝		三川内焼	小碗	9.1	5.5	2.9				円窓・菊・羅文	綾形文													
22	37	D2石だまり		青花	碗	14.8							軒厚による													
22	38	B3Ⅲ	彩色磁器	三		12.8						龍雲文														
22	39	D7Ⅲ	彩色磁器	小鉢		3.2																				

3. 土師質土器（第23図、第7表、図版9）

土器として取り上げた総数は1,223点で、そのうち796点が土師質土器である。その他は弥生土器、古墳時代の土師器、或いは碎片化した所属不明の遺物である。

土師質土器はすべて水挽き成形によって作られており、資料によってはスリックが掛かったようなものも散見される。分類法として大きさによってI～IIIの3群、調整手法によってa～dの2～3類に分類した。法量等については第7表を参照されたい。

I群（1～11）

口径6～8cm、器高1～2cm、底径3～5cm内に収まる一群で、粘土塊からの切り離しはすべて糸引き手法による。成形の手法から2類に分類される。

a類 底部から外湾気味に作られた体部に、内湾気味に立ちあがる口縁部がつくもの（1～6）。

b類 I aの口縁端部を擬口縁として、さらに外湾する口縁部がつくもの。口縁部内面に薄い僅かな肥厚部が認められる（7～11）。

II群（12～20）

I群より一回り大きく、口径9～11cm、器高2～3cm、底径3～5cm内に収まる一群で、粘土塊からの切り離しはすべて糸引き手法による。成形の手法からI群同様2類に分類される。

a類 I aの成形手法と似通っており、底部から外湾→内湾するもの。器壁は厚く、直線的に引き上げる傾向をもつ（12～14）。

b類 底部から外湾→内湾→外湾→内湾するもので、器壁はa類に比べて薄く引き上げられている（15～19）。17はb類との中間的な特徴を示す。

c類 底部の径からこの群に含めた。口径が底径より僅かに大きいもので、底部から直線的に立ちあがり胴部をなすもの。口唇部が欠損しているが、僅かな端反をみせるもの（20）。

d類 実測図を掲載していないが、III群d類をやや小形にしたもの。成形手法はIII群d類の23に同じで切り離しはヘラによっている。

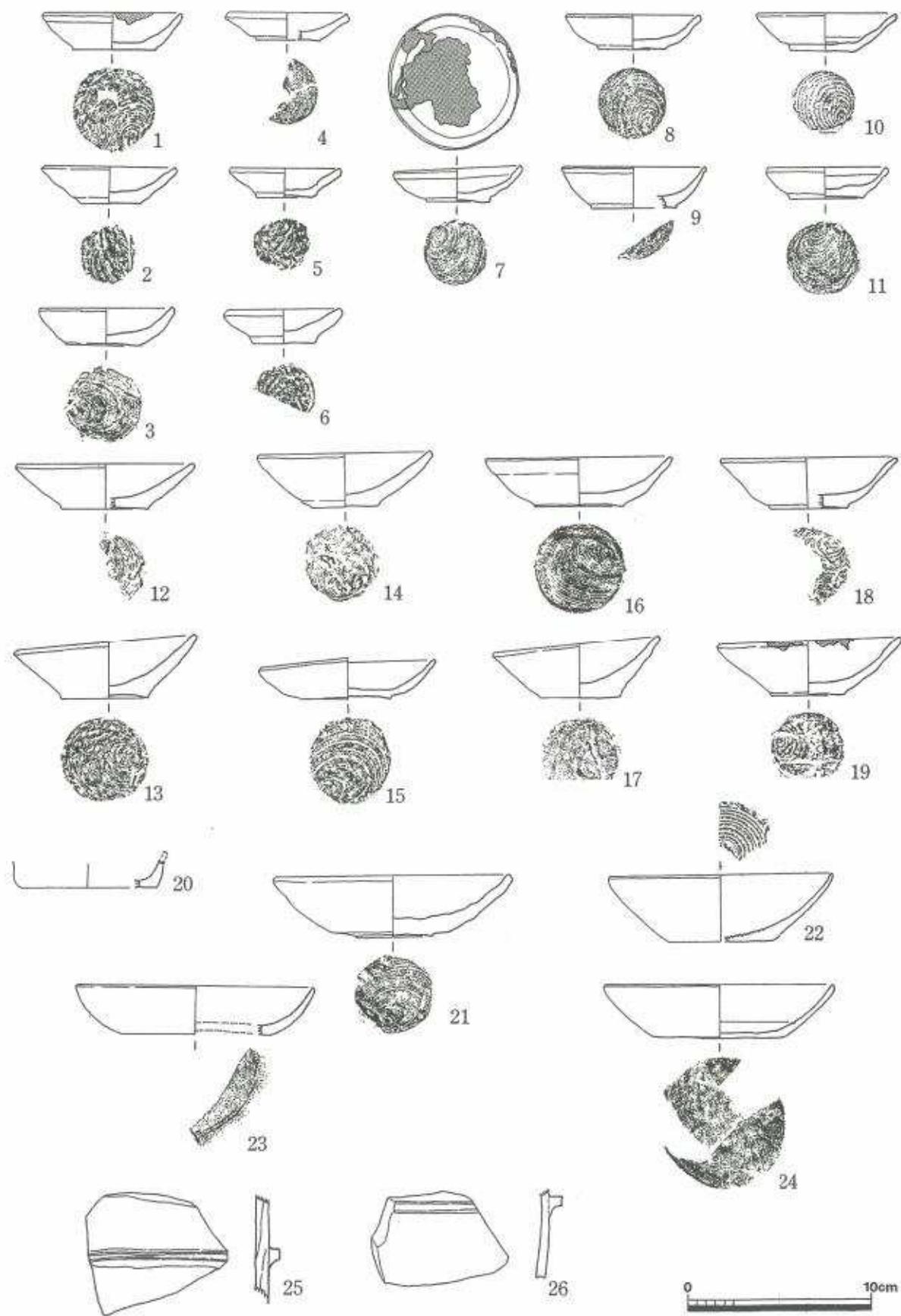
III群（21～24）

口径12～13cm、器高2～4cm、底径4～6cm、7～8cm内に収まるもので、切り離しの手法、器高から3類に分類できる。群中b類としたものは、I、II群中b類と同系統であることは首肯されるが、c、d類としたものは系統が異なる成形手法によっており、製作地を異とする招来品とみられる。

b類 I b、II bと同様手法によって成形されたもので、水挽きのクセが底部から外湾→内湾→外湾→内湾→内湾する。器壁は厚く、糸切り離し手法もI b、II bと共通する（21）。

c類 底部から非常に薄く水挽き成形され、口縁部は内湾する。見込中心部は厚さ2mm弱と薄い。見込に9条の断面V字形のカキ目を引いている。色調は内外面ともに灰白色で、胎土は水巻された緻密な土を用いる。切り離しはヘラによる一方向からの切り離しである（22）。

d類 23は底部から内湾気味に体部をつくり、内傾する口縁部をもつ。24は底部からやや直線的に伸びあがり、内傾する口縁部をなす。内面下部に見込との区画をなす圈線を一条引く。と



第23図 土師質土器実測図 (S-1/3)

もに成形・調整手法はc類と似通っている。切り離しはヘラによる一方からくり離しである(23、24)。

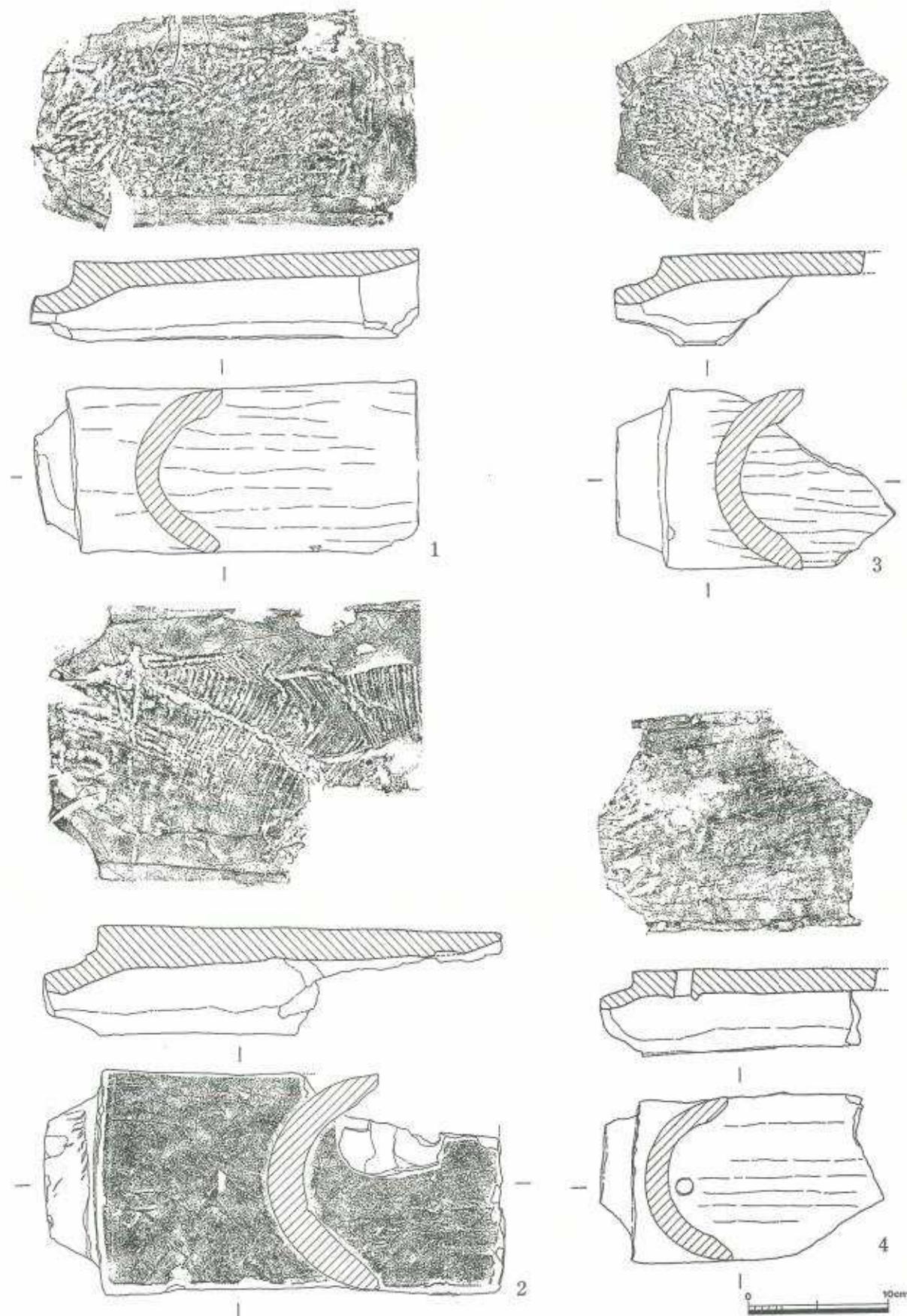
25、26は羽釜で、同一個体と思われる。ともに金雲母の微細片を多く含む。器表が荒れてい るため、調整方法は不明である。

4. 瓦(第24、25図・第8表・図版10)

瓦の種類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦がある。出土総数1,481点のうち、瓦当面がほとんどなかったため、軒瓦と認定できるものはごくわずかであった。

丸瓦(1~7)

1は一部欠損しているがほぼ完形のもの。凸面はタテ方向のヘラナデで成形時の調整痕の類が見えないほどていねいで黒光りしている。凹面には縄目と横方向のコビキが見られる。玉縁端部の面取りは1.4cm。前端の面取りは4.4cmと長い。2は大型の部類に入るすっしりとした重量感のある瓦である。凸面の調整は横方向のナデと格子状のタタキ。のちにタテ方向のていねいなナデである。凹面には布目と縄目が残る。玉縁部には内外面に指頭痕があり、指紋が観察できる。玉縁端部の面取りは1cm。前端部の面取りは3.5cm。3は凸面にタテ方向のていねいなナデ、わずかに横方向の調整が認められる。凹面には布目痕残る。玉縁端部の面取りは1.3cm。1や4と同様の形態と思われるが、これらと比べると玉縁部が長い。4は凹面に布目痕あり。砂粒の痕跡が顯著である。凹面の調整はタテ方向のていねいなヘラナデであるが、部分的にヨコ方向のナデ調整の痕跡が認められる。瓦止穴は凸面から空けられ、穴の端は丸瓦部の端から3.1cmのところにある。凹面は未調整。玉縁端部の面取りは0.9cmとごく短い。5は丸瓦の中でも最大のものである。器壁はやや荒れている。ヨコ方向のナデのちタテ方向のナデ。先端部に向かってやや反っており、かつ厚味を増している。玉縁端部の面取りはややシャープさを欠く。1~5の玉縁部はすべて横方向のナデである。6は無段式で断面は流線形を呈する。前端部及び後端部の面取りがされていないので、載切面の幅が広い。また側辺部の面取りがなされていないので、平坦面は1面のみである。このことは瓦としての機能に起因するものか単に未調整であるのかは判然としないが、寸法からみて他の丸瓦とは異質なものであり、機能に起因するものと思われる。これは7についても同様である。凹面には布目痕が残る。凸面の調整方向は他の丸瓦と異なり横方向である。前端部にわずかに格子状のタタキ痕が見られる。7は無段式で小振りの瓦である。前端部は破損のため不明であるが、後端部は有段式の丸瓦と同様に2cmほど面取りがされている。通常の丸瓦は側辺部の平坦面は2面であるが、この瓦は3面に面取りをしている。凸面はタテ方向のていねいなナデ。その後後端部をヨコ方向にナデる。凹面には横方向のコビキ。用途については判然としないが、門や塀などの施設に用いられた可能性がある。



第24図 瓦 実測図 ① (S-1/4)

軒丸瓦（8～11）

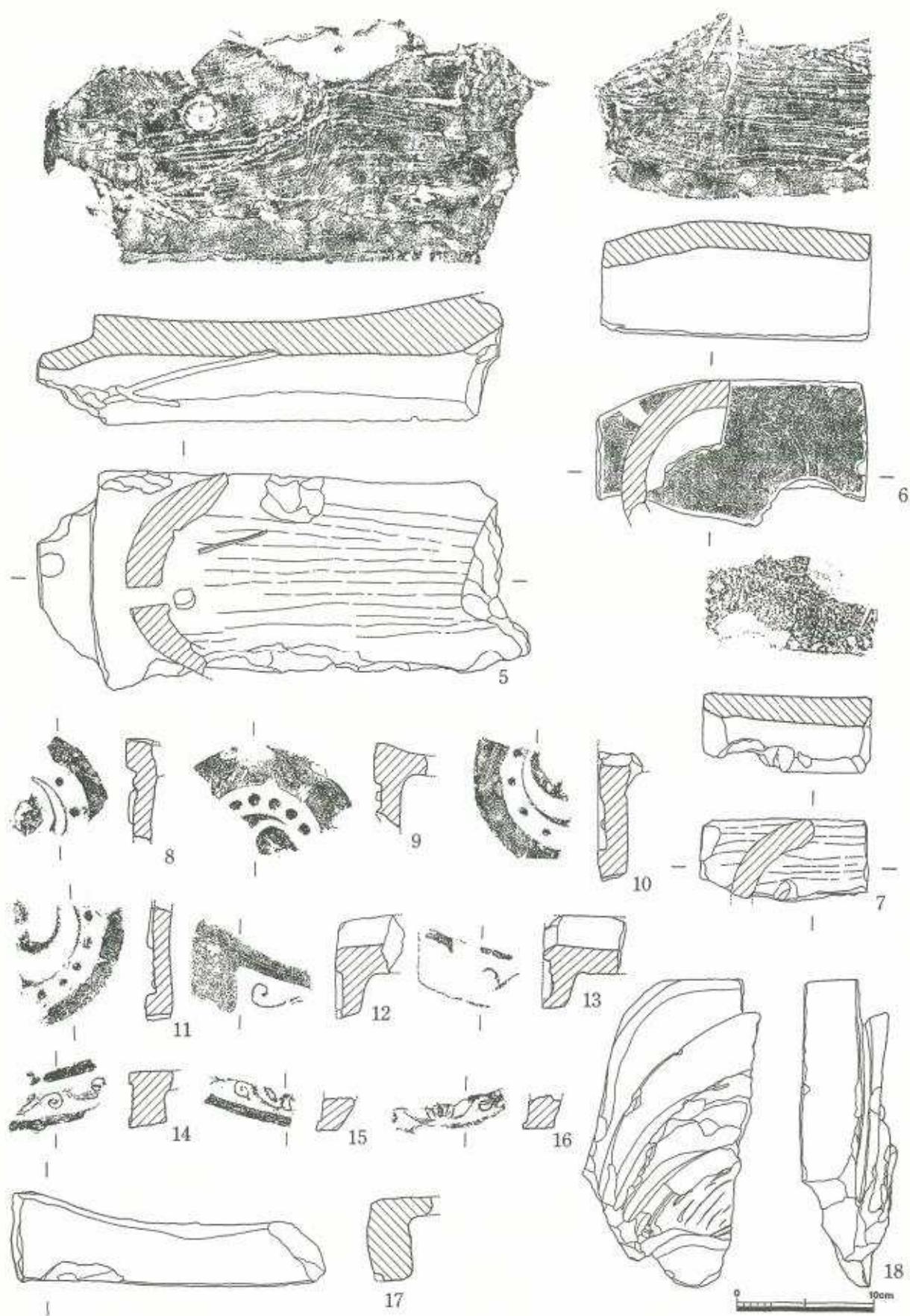
瓦当面の文様が残存しているものが今回の調査では表採1点を含めて計13点出土した。そのうち4点を図示した。

8は左巻きの巴文を有する。巴文の頭部はわずかに平坦面を有し、くびれ部から尾部にかけては三角形の断面を有する。尾は長く断面は尖り気味。先端部は互いに接する。珠文は2個が残存しているが、総数は10個と思われる。外区は狭く、高い。調整はナデ。9は右巻の三巴文を有する。巴文の頭部は平坦かつ肉太である。尾部は短くカマボコ型の断面を有する。珠文は密に配されている。5個が残存しているが、総数は16個と思われる。突出度が強く、立体感がある。外区は幅広。調整はナデ。胎土精良で焼成も堅緻、他の瓦とはやや異質な感じがする。巴文頭部に布目痕残る。10は左巻きの巴文を有する。頭部～尾部にかけて広い平坦面を持ち、偏平な感じである。尾部は長く、互いに接すると思われる。調整はナデ。11は左巻きの巴文を有する。頭部にはわずかに平坦面を有し、くびれ部から尾部にかけては三角形の断面を有する。尾部は非常に長い。珠文は5個が残存しているが、総数は16個と思われる。埃文は低く扁平である。外区は狭くかつ高い。調整はナデ。焼成は軟質で胎土はやや粗い。

全形を知れるものがないため、推測の域を出ないが、若干の考察を試みる。まず作りとしては、8、11は小振りで薄いつくり、9、10はこれより大きく厚手のつくりである。11は外区が狭く高い、珠文が小粒で密に配される、また尾が細く極端に長い（ほぼ同じ幅で伸びる部分が長い）、巴頭部は小さく、頭部と他の胴部との幅が広く、広い文様区をいっぱいに使い、のびのびとした、古い要素を持っている。8の頭部も小さく、外区は高い。文様や作りの点で共通性がある。ともに13cm台とやや小さい。10は胴部幅が広くなり、9は珠文が突出し、外区幅が広い。尾は細線部分を持たず、急速に収束する。文様は内側へと充実しているという新しい要素が見出せる。序列としては11→8→10→9の順序が考えられ、時期としては天正期（豊臣前期）～慶長期（豊臣後期）の範囲で捉えられると思われる。

軒平瓦（12～17）

出土総数は19点である。うち6点を図示した。瓦当面が大ぶりなもの（12、13）と小振りなもの（14～16）とに分けられる。12の唐草文は断面に稜を有する。脇区の幅が広く、文様区の上面が面取りされている。調整はナデ。胎土には細砂粒を多く含んでいる。13は12と同じく脇区の幅が広い。上面は全体が面取りされている。脇区側面及び平瓦部には板状工具による調整痕が見られる。脇区が欠損しているため、唐草文はかろうじて残っている。文様は稜を有する。裏の瓦当面との接続部分には指おさえの痕跡が顕著である。14は中心飾りの三つ葉の右側部分がかすかに残る。唐草の巻き込みは強く、渦巻き状をなす。蔓ののびはまろやかな感じである。調整はナデ。15は中心飾りが残る。三つ葉の廻りを囲むタイプであろう。唐草の巻き込みはやや弱く。唐草の伸びは14と比べて寸詰まりな感じである。外区は非常に狭く、平坦面がほとんどない。調整はナデ。胎土は細砂粒がわずかに見られる。16は中心飾りから左側部分が



第25図 瓦 実測図 ② (S-1/4)

残る。飾りは肉厚でくっきりとしている。唐草は巻き込みが強く、渦巻き状をなす。寸詰まりな感じである。14～16の細線はいずれもシャープさを欠き、文様は退化傾向にあるが、14、16の唐草の巻き込みは割合強い。17は瓦当面の文様がない資料である。他の軒平瓦と比べて焼成は軟質で、全体的なつくりも甘く、シャープさが見られない。上面は面取りされている。

12、13については上面を広く面とりする点、文様が比較的シャープな点などの古い要素が見られる。14～16の序列としては、14の上面に面取りがないこと、ともに唐草の巻き込みが強く中心飾りが強く外反する点など、14、16は3点の中では古く位置づけられよう。15は中心飾りの周囲を園線で囲うやや異質のものであるが、後続するのではないかと思われる。時期的には、軒丸瓦と同じく、天正期～慶長期に属すると見られる。

道具瓦（18）

18は破損が著しいため全形を知り得ないが、波文棟鬼瓦と思われる。表側の波文の所と外周部分は指ナデが顕著である。裏面は外周部分を1～1.5cmほど面取りする。内側はナデ調整。胎土は精良で焼成は堅緻である。

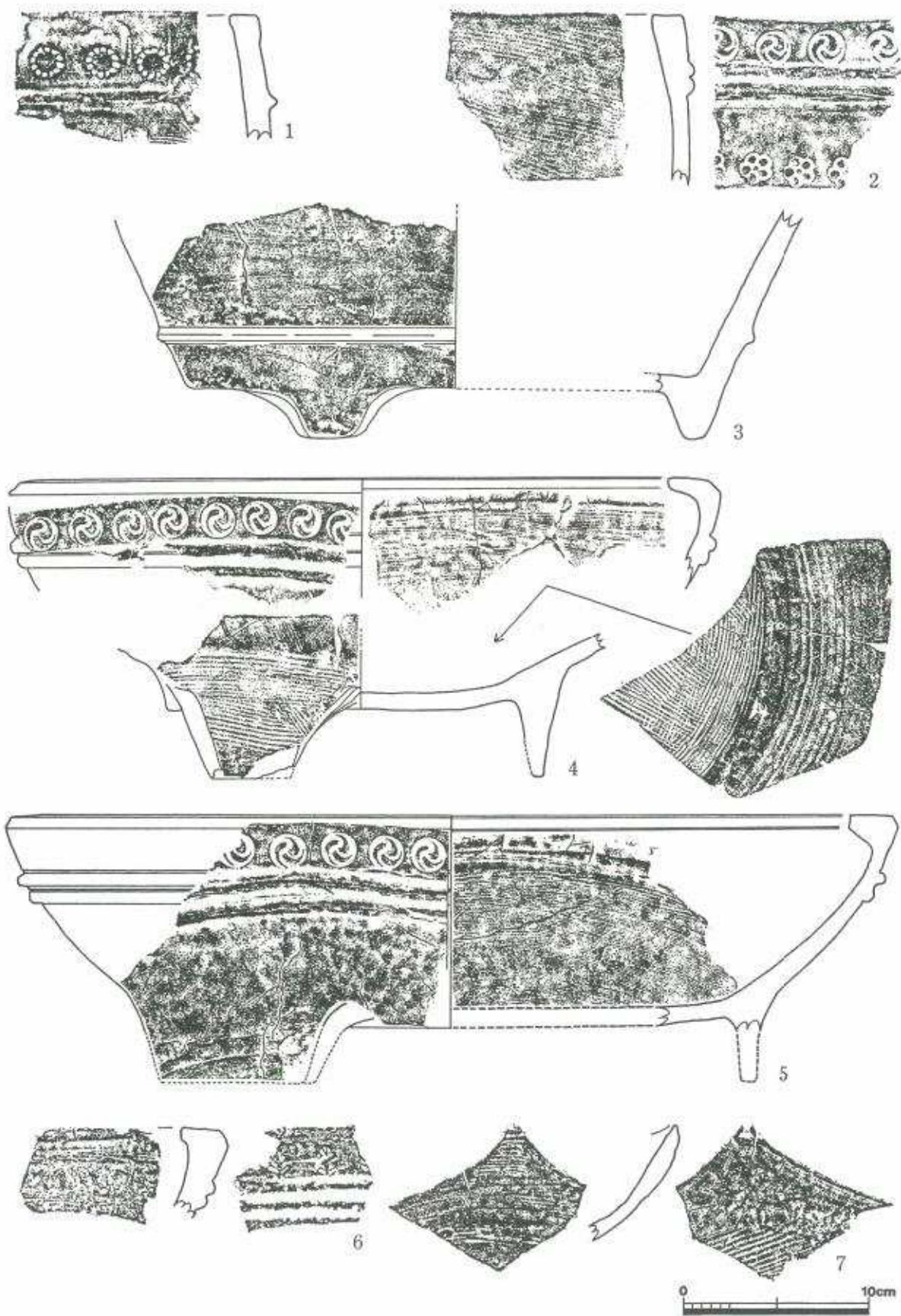
5. 瓦質土器（第26、27図・第9表・図版10）

今回の調査では総数389点が出土し、器種としては火鉢・土鍋・羽釜・擂鉢が見られる。

火鉢（1～6）

1～3は深鉢形の火鉢である。1は断面三角形の突帯を1条有し、そのやや上部に12個の刺突を円形に配する文様を有する。端部は平坦で内外にわずかに肥厚する。突帯の下方に2条の弧状沈線を有するが、部分的なものであり文様構成については判然としないが、波状沈線の一部と思われる。胎土は軟質である。調整は内外面ともにナデ。2はM字状の突帯を有し、その直上に三巴文、やや下がった位置に五弁の花文を有する。器壁は胴部から口縁部へ向かって厚みを増す。端部は平坦であるがナデによりわずかに凹む。調整は外面ナデ、内面斜位のハケのあとナデ。3は短い脚部を有する。胴部下半に突帯を有する。外面は板状工具によるナデで、内面はナデ調整である。胎土は軟質で内面において間隙が目立つ。

4～6は浅鉢形の火鉢。4の口縁部は尖り気味に内湾する。M字状の突帯を有し、直上に三巴文を有する。外面ナデで内面は内湾部の付け根までハケ調整。胎土は精選され、硬質な感じである。脚部は5のものより小ぶりである。調整は内外面ともに横位のハケ。底部内面の見込部分と外面の調整は8条単位のハケ。内面の立ち上がり部は板状工具によるナデ。胎土は精選され、内面には光沢がある。5は4より大き目の火鉢である。4よりも太いM字状突帯を有し、直上に三巴文を有する。端部は内湾するが、4と異なり面取りされた平坦面を有する。脚部は上方のみがわずかに残る。外面は底部がハケ。他は縦方向のていねいなヘラナデで、光沢があ



第26図 瓦質土器実測図① (S-1/3)

る。内面は内湾部の付け根までハケ。底部外面は黒化している。胎土は精良であり、調整の方法と相俟って5よりもシャープな印象を受ける。6はM字状の突帯を有し、直上に木葉状のスタンプを有する。端部はわずかに内湾する。器表はやや荒れているが、外面ナデ、内面は内湾部付け根までハケ調整である。焼成は軟質である。

浅鉢（7）

7は山形口縁を有する。器壁は口縁部に向かって肥厚する。端部は平坦である。外面は屈曲部から底部にかけてハケで、上部はナデ調整。内面はハケのあとナデ。

土鍋（8、9）

8、9はともに口径の割に器高が低い。8は口縁部がわずかに肥厚し、端部に平坦面を有する。外面は底部がハケ調整、胴部はササラ状のハケで、全面にススが付着している。内面はハケ調整をナデ消している。9は8と同様の器形・調整であるが、8が比較的なだらかに立ち上がるのに対し、若干屈曲している。内面はハケのあと、8よりもていねいにナデ消している。外面の胴部～口縁部にかけてススが付着している。また、端部に把手（鉄）の痕跡がある。

擂鉢（10）

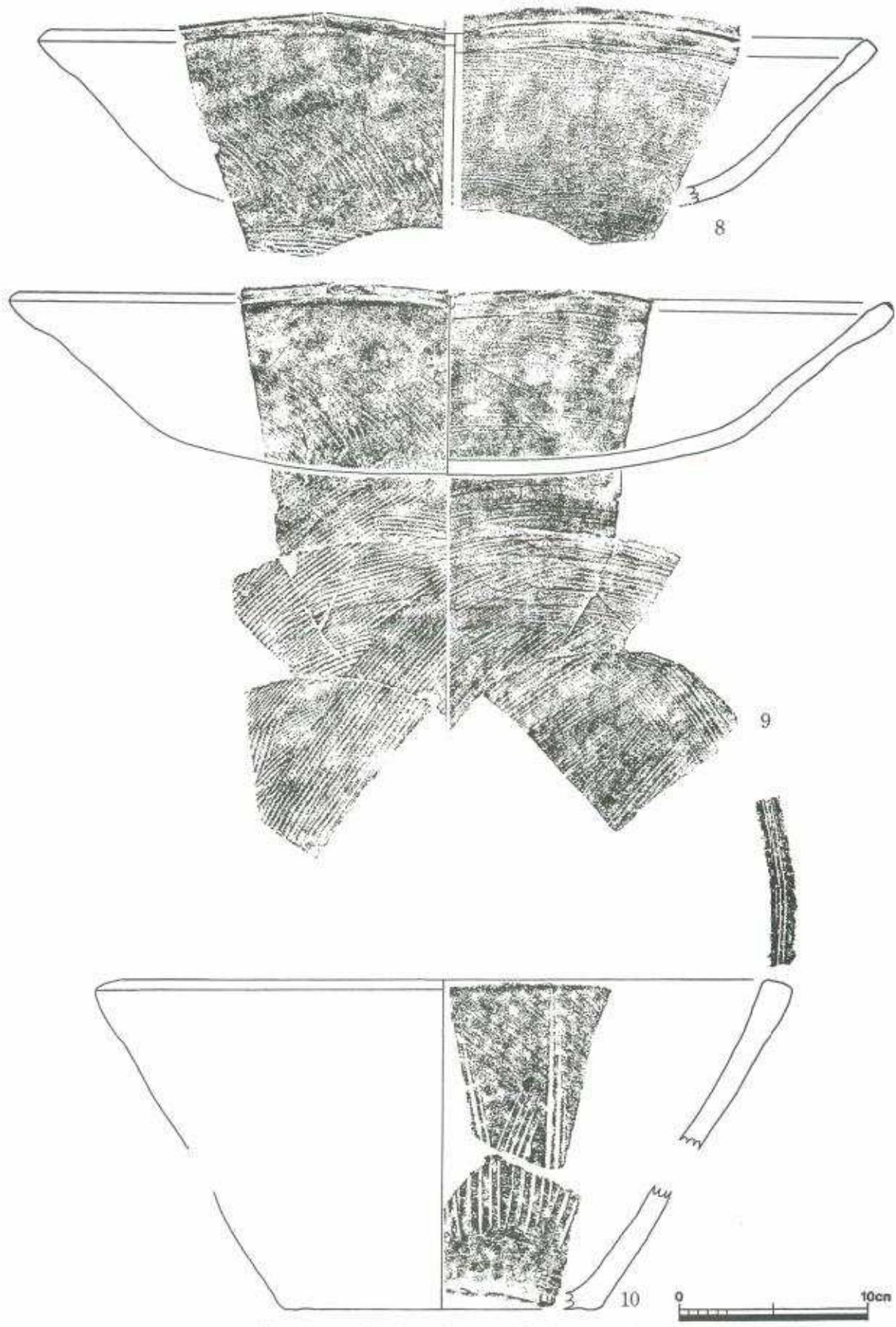
10は接合資料ではないが、おそらく同一個体と思われる。端部を肥厚させる器形で、内面には口縁部では斜位のハケ、底部ではヨコナデを施したあと、5条単位の擂目を入れる。

6. 木製品（第28～30図・第10表・図版10、11）

多くの溝状遺構が検出されたことや低湿地という地理的条件から、保存状態に恵まれていたため、量・種類ともに豊富な木製品が出土した。総数は1,220点である。什器類、墨書き筒、農具、工具、下駄などが見られる。紙面の都合上、ごく一部の特徴的な遺物のみしか掲載しえなかつた。図示できなかったものとして杭や板鍬、杉薄板で下地材と思われるものなどがある。

什器類容器（1～9）

1～3は杯。1、2は黒漆で、1は轆轤引きにより器形を作り出す。2は内面屈曲部に輪状のカンナ痕が認められる。ともに平坦な畳付けを有する。3は茶漆。杯の中では、2が最も身が浅い。4、5は椀で4は外面黒漆・内面赤漆である。5は土圧により若干の歪みが認められるが、高台が薄く、底部が分厚い器形である。6は筒形椀。胴部に断面三角形の突帯を削り出す。底部は分厚く、高台際は削り出す。7は黒漆の蓋。5や8の蓋かと思われる。8は黒漆椀。土圧によるものか変形が著しい。底部は分厚く、高台は2.5cmと高い。もともとは身は深いものであったと思われる。5から8はセット関係にあると思われる。9は鍋蓋。把手は欠損している。



第27図 瓦質土器実測図② (S-1/3)

標高 固 番 号	出 土 地 点	番 号	形 式			口 徑			深 度			口 徑 方 向			色 調			底 土			燒 灰		
			直	斜	圓	直	斜	圓	直	斜	圓	直	斜	圓	直	斜	圓	直	斜	圓	直	斜	圓
23	D18K11	1	7.5	7.5	2	4.4	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	B13K96	2	7.2	7.2	2	3	時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	3	B-1-C22+39	7.2	7.2	2	3.6	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	4	B-1-C26+37	6.7	6.7	1.5	3.8	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	5	B-1-C25	6.1	6.1	1.6	3.2	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	6	B-1-C28	6.1	6.1	1.9	3.4	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	7	B13K92	7	7	1.8	3.5	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	8	B13K10	7.3	7.3	1.9	3.6	反時計		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	9	B13K17	7.6	7.6	2.2	4.6	反時計		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	10	B13K10	7.6	7.6	2	3.5	反時計		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	新				
23	11	B13K15+16	6.6	6.6	1.7	3.9	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	12	B-1-E20	9.4	9.4	2.4	4.6	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	13	B-1-D23	9.8	9.8	3	4.6	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	14	B13K20+24+29	9.4	9.4	2.9	3.6	反時計		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	15	D13K26	9.5	9.5	2~2.2	4.7	反時計		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	16	B13K25	10.2	10.2	2.0	5	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	17	B-1-C31	9.1	9.1	2.9	4.4	反時計		黃茶			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	18	B-1-E24	9.6	9.6	3.7	4.2	反時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	19	B13K02	10	10	2.9	3.8	反時計		全黑(木炭質)			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	20	B13K36	10.3	10.3	1.3	7.4	不明		橘黃			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	21	B-1-E15+16+21	12.9	12.9	3.3	4	反時計		水灰-米黑			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	22	B13K07	12.2	12.2	3.6	5.6	時計		黃白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	23	B13K40+50+57	12.3	12.3	2.6	7.8	時計		水灰			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	24	B13K41+47+51+55+57+68	12.6	12.6	3	7	時計		水-灰白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	25	Bi-1	12.6	12.6	3	7	時計		水白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				
23	26	Bi-1	12.6	12.6	3	7	時計		水白			橘黃			橘	良	橘黃	良	好				

表第7 土質土器觀察表

表 8-1 瓦觀察表

原書名	卷	題名	著者	翻訳者	出版社	年月
10 國語	1	泥土燒成 章号	豊野(津)	外國風	田村鶴文	明治11年
26 1 B3Ⅲ	火葬(津)	(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	左幸二文・新松文	
26 2 B3Ⅲ	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	勝成5	
26 3 B3Ⅲ	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	勝成4之	
26 4 B154+115+148+155	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	左幸二文	
26 5 B-1-A18+19+20	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	左幸二文	
26 6 A3Ⅲ	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	山形日報	
26 7 B1Ⅲ	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	
27 8 B154+121+135+126	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	
27 9 B154+121+137+150+151	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	
27 10 B154+121+137+150+151	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	
27 11 B154+121+137+150+151	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	
27 12 B154+121+137+150+151	火葬(津)	(外)火葬(外)火葬	是好通(外)ナガチ	是好通(外)ナガチ	外國久井裕	

第9表 瓦質土器觀察表

部分的に黒化している。

什器類食事具（20～22）

20、21はしゃもじ。21は20よりも柄が細く、20が身部から頸部へなだらかに移行するのに対し、若干の屈曲を有する。22は上方に反り気味の身部と細長い柄を有する杓子。頸部と柄部との境に段を持つ。身部の表面は赤漆。裏面と柄部は黒漆。

木筒（10～14）

今回の調査で出土した木筒はすべて売買取引、物資の調達・移動に関する覚え、荷札・付札及び呪符に関するものと思われる。

10は角柱状のものである。一面は二次使用の際に割取されている。他の三面に墨書があるが、二面は割取のため文字の残りが悪く判読できない。残りの良い一面には「態一不■■つヵ人ヵてヵ■取のヵ■」の墨書があるが前後が欠けているため文意は不明である。一種の呪符のようなものであるかもしれないが推測の域を出ない。なお、刻みを入れたり、2個所に円形のくぼみをいれるなど、二次的に使用されている。11は両面に墨書がある。図の左側に「■■三■入多ヵ■■」と8文字が書かれる。上2文字は解読できないが、次の3文字「三■入」が数量を表わすと考えられるので、何かの品名であろう。次の「多ヵ■■」は人名の可能性が高い。図の右側には3～4文字が書かれ、「■■■村」又は「■■村」であり、物品調達の覚えと思われる。12は片面6文字の墨書。左に「白金ヵ三つ入■」とあり、荷札・付札の類であろう。上部にV字形の切り込みを入れている。右にも墨書があった可能性もあるが、現状では認められない。13は形態・材質ともに12と同様で、両面に墨書がある。左には「白金ヵ三つ」とあり、12と同じ内容である。右には「仁五郎ヵ」とあり、人名であろう。14は両面に墨書がある。左には3文字あるが判読できない。右には「■■三つ」とある。下端が先細りに削られているため、形態が不明であるが11～13と同様のものであろう。

なお、図示したものの他に、用途不明木製品の側板（30.7×3.5×0.8cm）に「石勺斗田ヵと4文字を墨書したものがある。底部の側板であることと、運筆から縦書行の終わりの文字と考えられる。用途については一応不明としたが、文字等から「升」である可能性も否定できない。

農具（15、17、24）

15は脱穀用の農具である鬼歯の先端部。歯は4つで柄の差込部分で半分に割れている。17は蓆編具。断面楕円形の木材の中央にくびれ部をつくり、この部分に紐を巻いておもりとして使用し、蓆などを編んだと思われる。24は糸車。押え板及びハンドルは欠損している。骨数は16本で、車の直径は80cmほどになると思われる。

工具 (23)

23は身と柄の幅が同程度で、細長い身部を有する。身部の幅が狭いため、「すくう」機能に適さないことから、ヘラとしての機能が想定される。表面はケズリで成形されるが、摩耗しているため方向は不明である。

その他の木製品 (16、18、19)

16は板材を十字に組んだ上に薄い円板を置き、芯棒付きの火皿を載せて、鉄釘で固定している。剥落が激しいが本来は黒漆塗りであったと思われる。18は舟形製品。舟首の一部が欠損しているが、写実的なつくりである。舳先には径2mmほど穿孔されている。玩具かと思われるが、祭祀関連遺物の可能性もある（註）。19は和傘の骨材。穿溝の数は48本である。

（註） 松下正司ほか 1974 「草戸千軒遺跡 第11～14次発掘調査概要」
(広島県教育委員会、広島県文化財協会)

下駄 (25～33)

今回の調査で出土した下駄は種別の判明するものが86点である。すべて溝状遺構及び鋳造関連土壙群（B-1）・廃棄壙（D-2）などの遺構に伴うものである。分類したものから代表的な分のみを記載している。

地点ごとの数は、

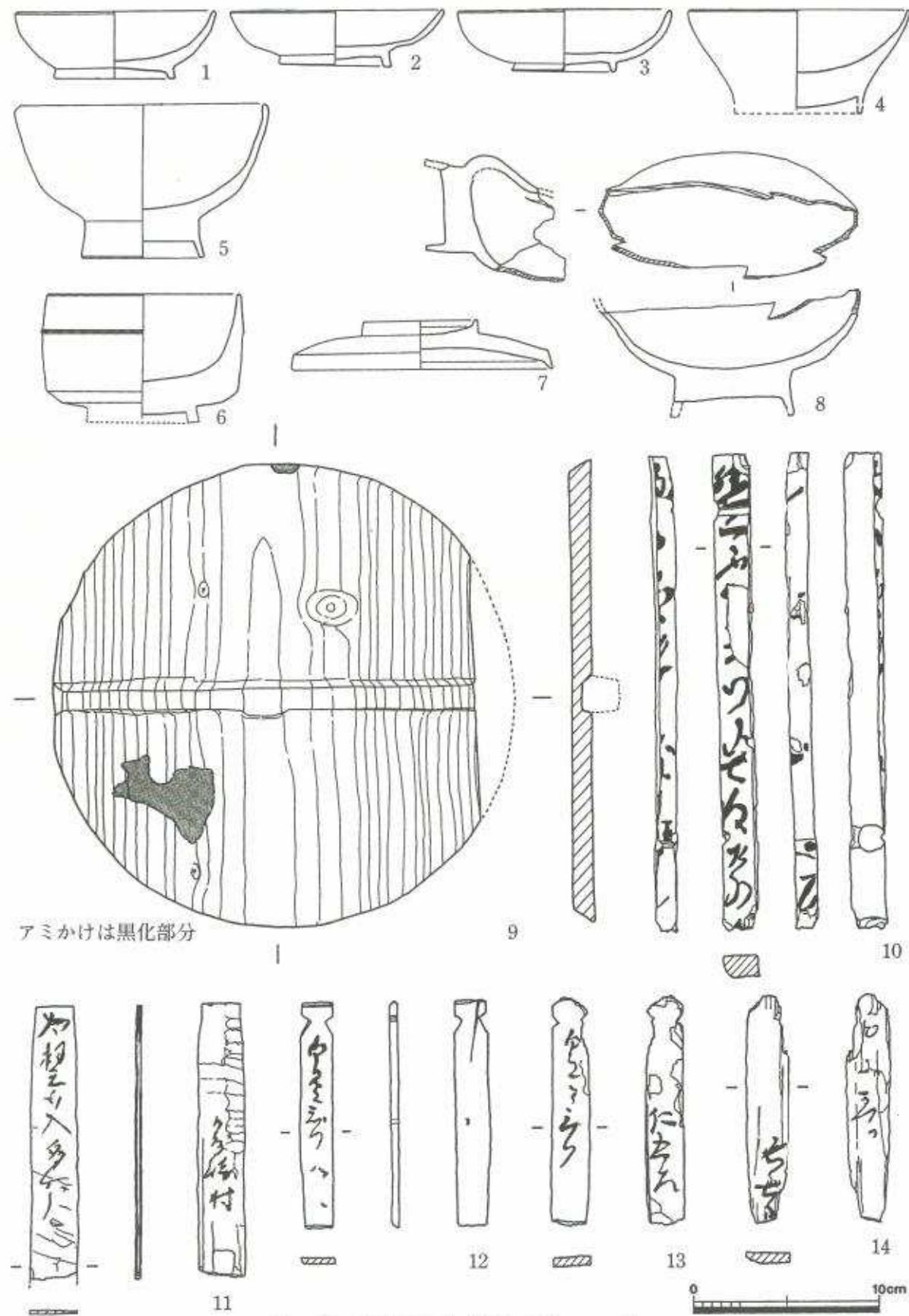
A-8 溝状遺構	33点
C-6 溝状遺構	34点
C-9 溝状遺構	16点
B-1-B 遺構	1点
B-1-C 遺構	1点
D-2 廃棄壙	1点

分類及びそれぞれの数量については以下のとおりである。

a) 前のめりの前歯をもつもの（芝翫下駄）	16点
b) 現在でいう下駄に近い形（駒下駄）	20点
c) 裏面の中央部を削りぬいて歯状にしたもの（庭下駄）	4点
d) 台部分に蘭草（いぐさ）の畳表をつけるもの（草履下駄）	24点
e) 後歯のみを差歎にするもの（のめり後歯型下駄）	1点
f) 前・後歯ともに差歎とするもの（朴歎型下駄）	21点

の6種類がある。

25、26はa)に属する。歯の高低で2種類ある。ともに台部から歯にかけて幅広なつくりである。前穴は歯を貫通している。25は台部分の平坦面が狭い。26は歯にかけて強く張り出す。歯



第28図 木製品実測図① (S-1/3)

がひときわ高いこともあって、非常に重厚なつくりである。後歯は木目に沿って欠損している。

27、28はb)に属する。断面では27は前歯がややうしろに下がった位置、28は左右対称な位置に歯がつけられている。台部と歯の幅はほぼ同じである。27は歯間のえぐりが顕著である。前歯には竹くぎ状のものが3本貫通している。28の台部分はごくうすい。前・後歯ともにほとんど残っていない。

29と30は割りぬいた歯を持つものでc)に属し、a)と同じく歯の高低で2種類ある。29は高いコの字形の前歯を有する。台部及び前歯とともにシャープなつくりである。前端部には台から歯にかけて段がつく。後歯は欠損している。前穴は歯にかからない。後穴は左右対称に大小2個ずつと後端部の計5個ある。大きい方の穿孔は、他の下駄が前方ないし後方へ向かって斜めにされるのに対し、内側へ向かって斜めにされている。小さい方はかかとを固定するためのものと思われる。30は前後ともにコの字形の歯を有する。29と異なり、前穴は歯を貫通している。台から歯にかけてやや幅広。前穴は後方へ向かって斜めに開けられる。

31はd)に属する。草履下駄の台部分で、前方5個所・後方2個所に骨表をつけるための小さな紐穴があり、繊維状のものが詰まっている。裏面には両側面にえぐりがある。

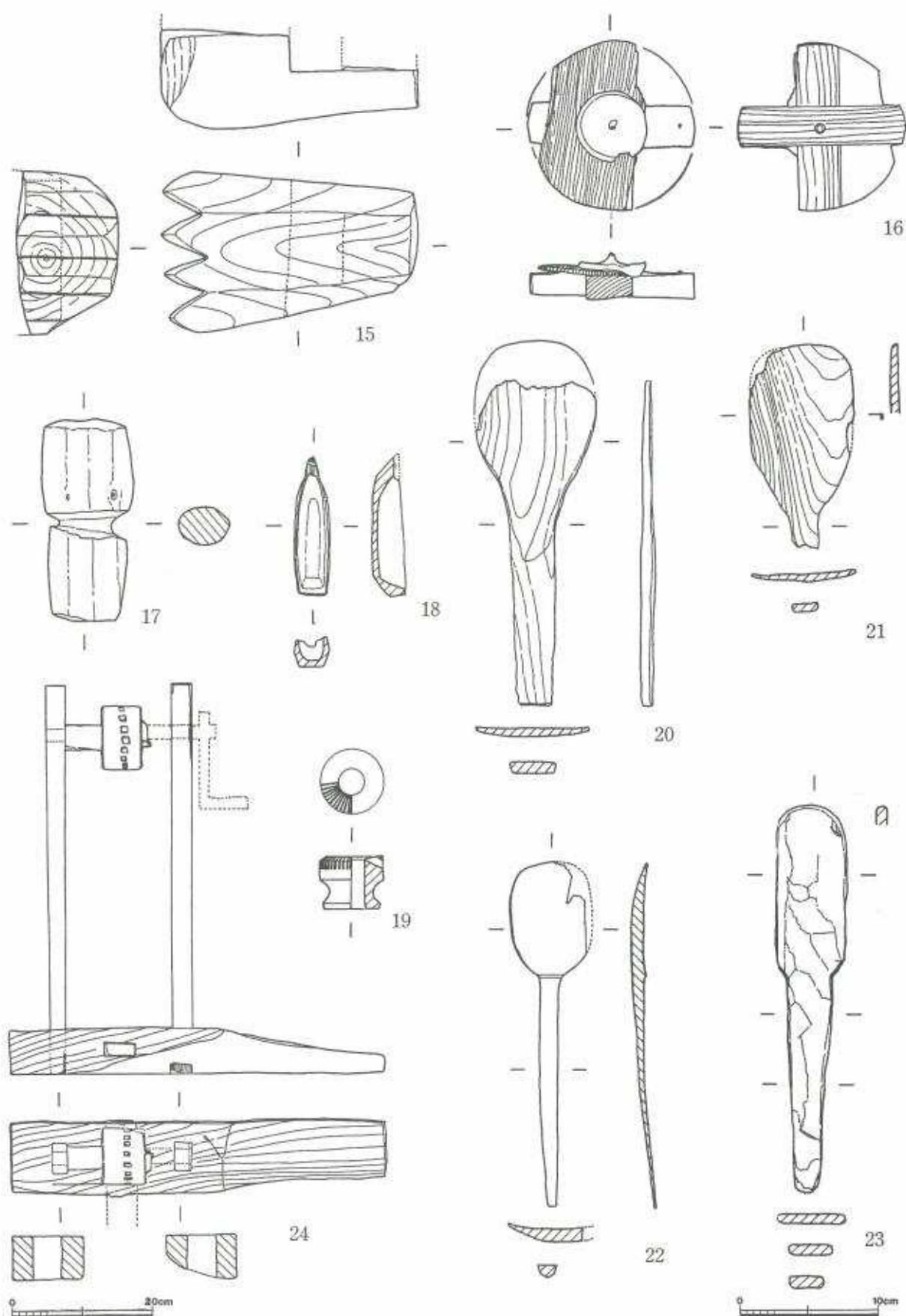
32はe)に属する。a)と同じく、前穴は歯を貫通している。後穴は上面から見ると左右非対称となっている。

33はf)に属する。台は船底形で、台形の高い歯を有する。

7. その他の遺物（第31～33図・第11、12表・図版11）

ここでは金属製品・石製品・骨角器や近世以前の磁器などについて記述する。

1～4は煙管の雁首。1は火皿に接続する脂返し部分が細くなり、河骨形に湾曲している。青銅製。2は1と比べて接続部分が太く、湾曲は小さい。鉄製。3、4はともに蛇紋岩製の雁首。3は導管側が破損している。4は立方体の上面を割りぬいて火皿とし、側面に穿孔し、導管を接続するものと思われる。5、6は吸口。5は端部に向かってゆるやかにすぼまる。6は5よりもぞんぐりした形状である。7はめんこ。瓦質で、表は平滑で縦方向のハケのちにナデ、裏面は9条単位のハケを弧状に施す。ほかに陶器を転用したものもある。8は滑石製石鍋。断面台形の鍔を有する。器面から鍔にかけての移行は明確に屈曲している。内面は平滑に仕上げる。口縁が直立するタイプと思われる。9～14は寛永通宝。10、12、13は古寛永（ス宝銭）。9、11、14は新寛永（ハ宝銭）。12は不明。15は北宋銭の聖宋元宝。初鑄は1101年である。16～20は弾丸で16は鉄製、17～19は鉛製。20は青銅製である。17、18、20は鋳型で作られており、形状は真円である。ともに線状のキズがある。19は使用のためか、微細な凹凸が認められる。20は中央に鋳型の痕跡と思われるスジが入っている。21～23は石製の碁石。いずれも黒石で、21、23は平らに加工しているが、22は自然転疊を使用。白石については磁器を使用した可能性がある。24、25

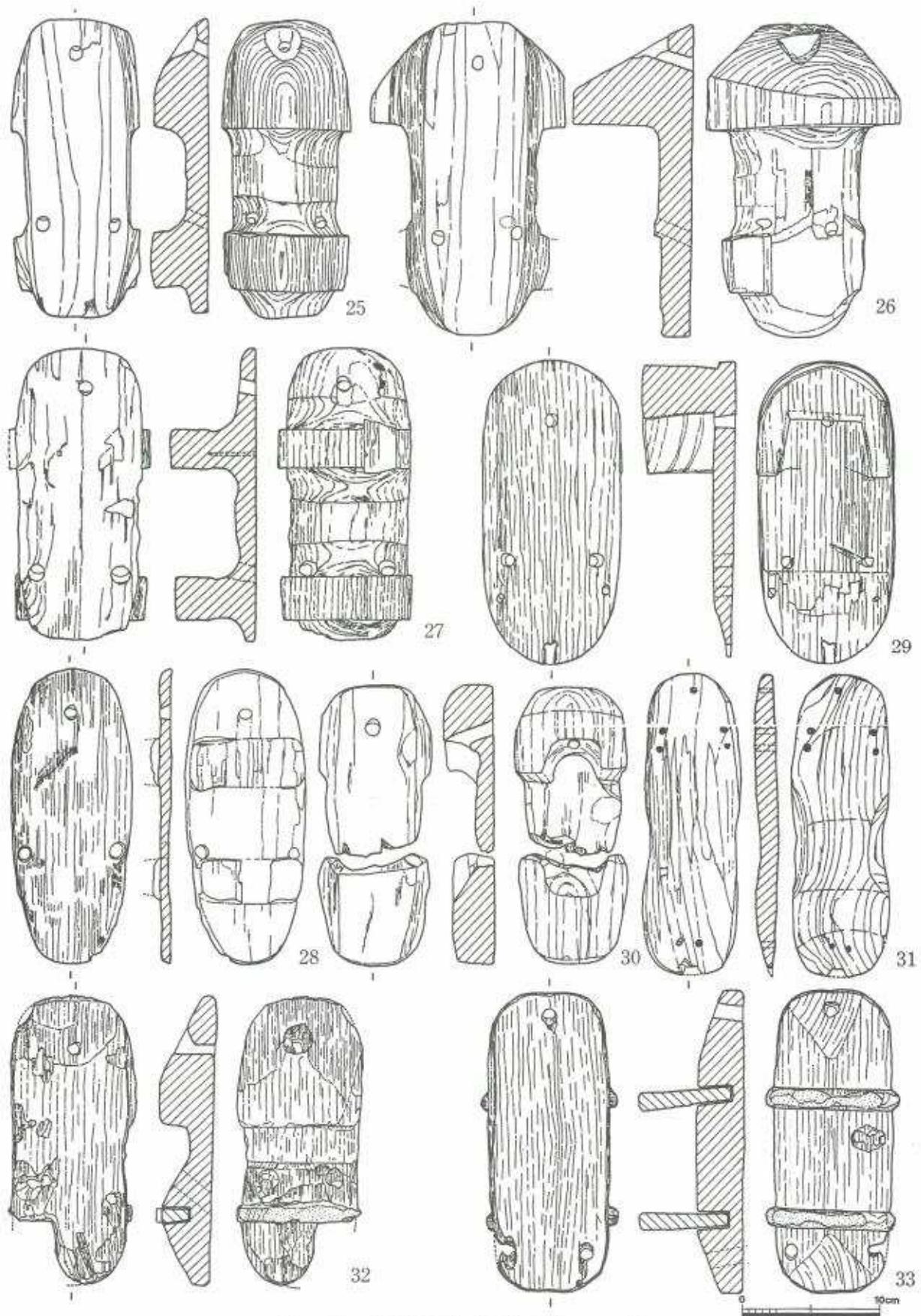


第29図 木製品実測図② (24はS-1/8、他はS-1/4)

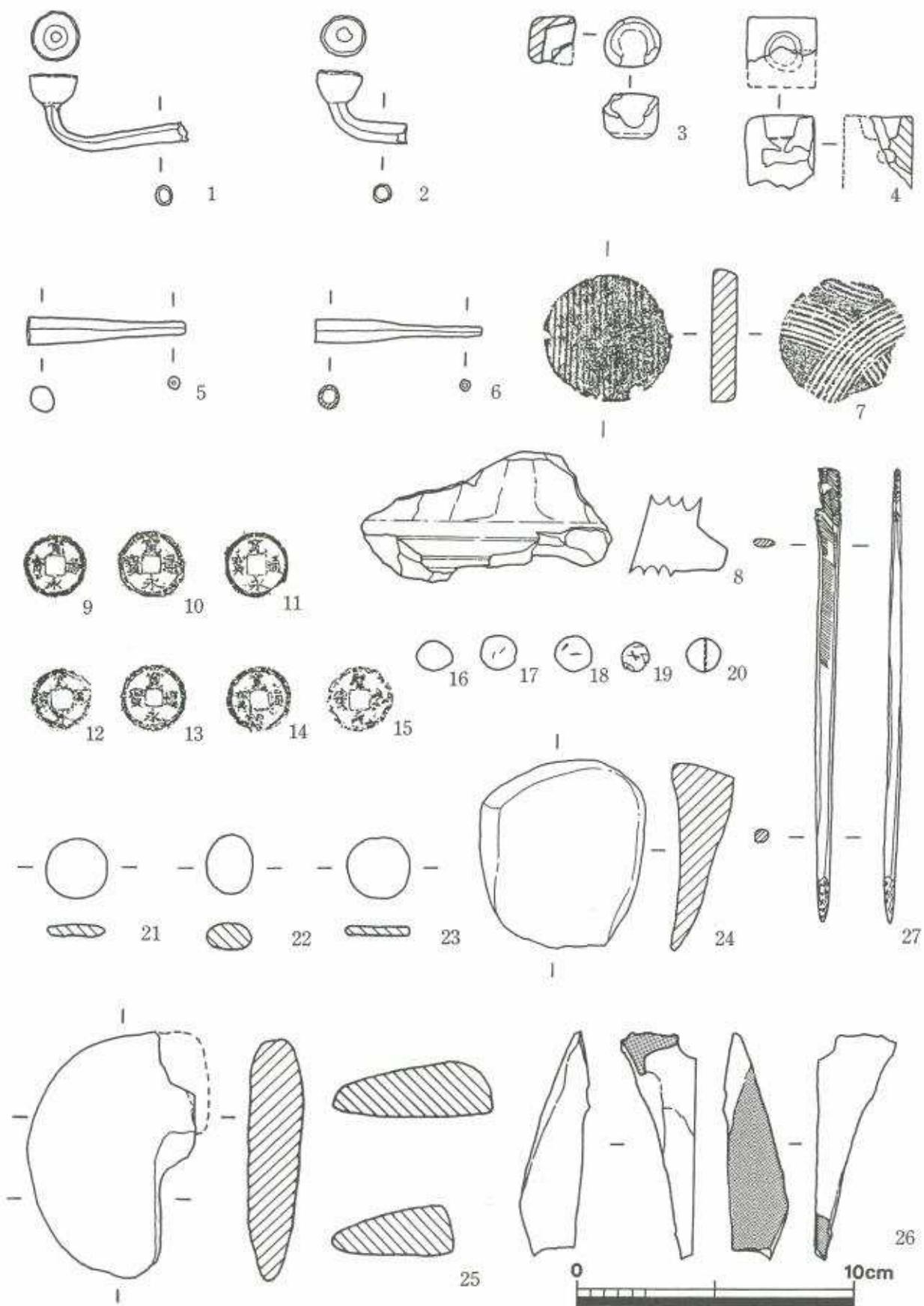
はスス（ヘグラ）落とし。全面使用を原則とするが、25のように一部に加工を施すものがある。ともに軽石製。27は骨角器。軸部の断面は丸く、基部はヘラ状を呈する。全体的になめらかで艶がある。基部の両側面及び端部には縛るために微細な刻みを有する。軸部の先端には海綿質が一部露出している。26、28は砥石。26は仕上砥で、砥石面（アミかけ部分）は3面である。頁岩製。28は荒砥で、砥石面（アミかけ部分）は3面である。砂岩製。この他に中砥と思われる天草石製の砥石がある。29は片口付碾臼の片口部分で、阿蘇溶結凝岩製。30は石臼（上臼）。挽棒打込部は下方が欠損しているが、深さ3cmを測る。

31～36は鋳造に係わる遺物である。31～35はすべて土師質土器であるが、部分的に白～暗紫色の被膜が見られ、かつ鉄滓が付着していることから、坩堝とした。31は器壁が厚く内面に鉄滓が付着している。口縁端部に微細な気泡が認められる。32は鉄滓の付着が最も顕著。内面に気泡が認められる。微細な滑石を混入する。33は内面に緑青、内面から口縁外面に鉄滓が付着している。34は土師質土器分類でいうIa類に属する小皿である。口縁内面下に鉄滓がわずかに付着している。35は最大径が胴部中位にあり、口縁部がすぼまる器形。底部を欠いている。器壁は厚く、所々に灰被りの緑色の釉が乗っている。36は鞴の羽口。断面は隅丸方形を呈し、径2cmの通風孔を有する。図の左側が赤変、また熔融が顕著で、白濁化していることから、こちらが炉心に近いと思われる。砂岩製。

37、38は弥生土器の甕。37は中期で、逆L字形に短く外反する口縁を有する。調整は外面タテハケ、口縁端部は内外面ともにハケのちナデ、内面ナデ。38は後期の突帯を有する甕で、突帯はかまぼこ状。端部には平坦面を有する。調整はていねいなナデ。肩部内面のみタタキ風のナデ。胴部下端にススが付着。39、40は土師器。ともに器表が荒れており、調整手法は不明。石英・長石などの細砂粒を多く含んでいる。39は複合口縁壺。端部はつまみぎみにおさめる。40は高杯の脚部。41～43は龍泉窯系の青磁碗。41は片切彫の鎧蓮弁を陽刻するが、盛り上がりにやや欠ける。細かな嵌入が認められる。42は蓮弁の鎧を失ったもの。43は器壁が厚く、蓮弁の鎧はわずかに盛り上がる。44は青磁小皿。内外のケズリは幅の狭い丸彫。45は青磁香炉。嵌入が荒く入る。46は白磁の玉縁碗。41、43、45の胎土は精良でねずみ色を呈する。42は白色。44、46の胎土には青白磁特有の湿感がある。

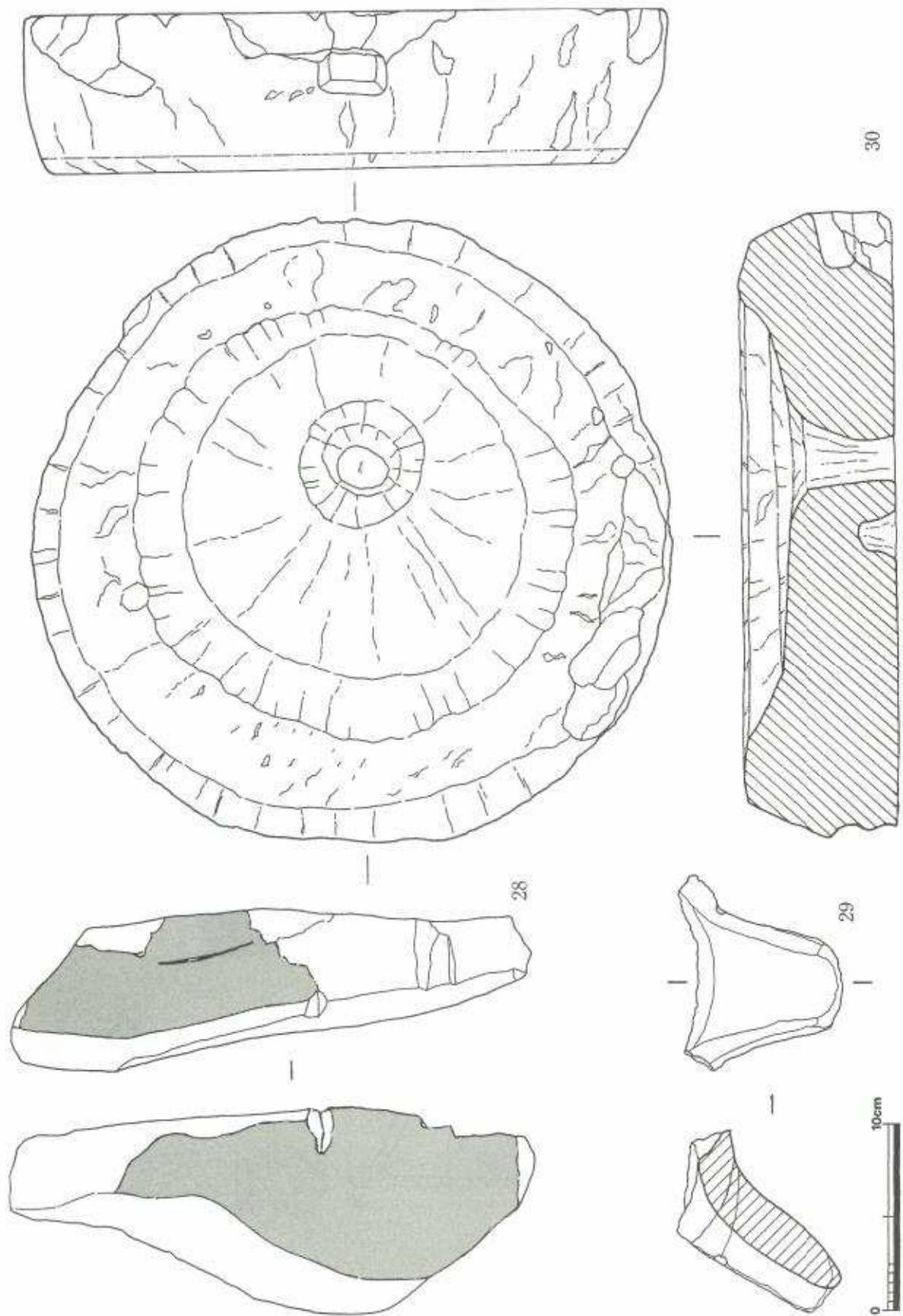


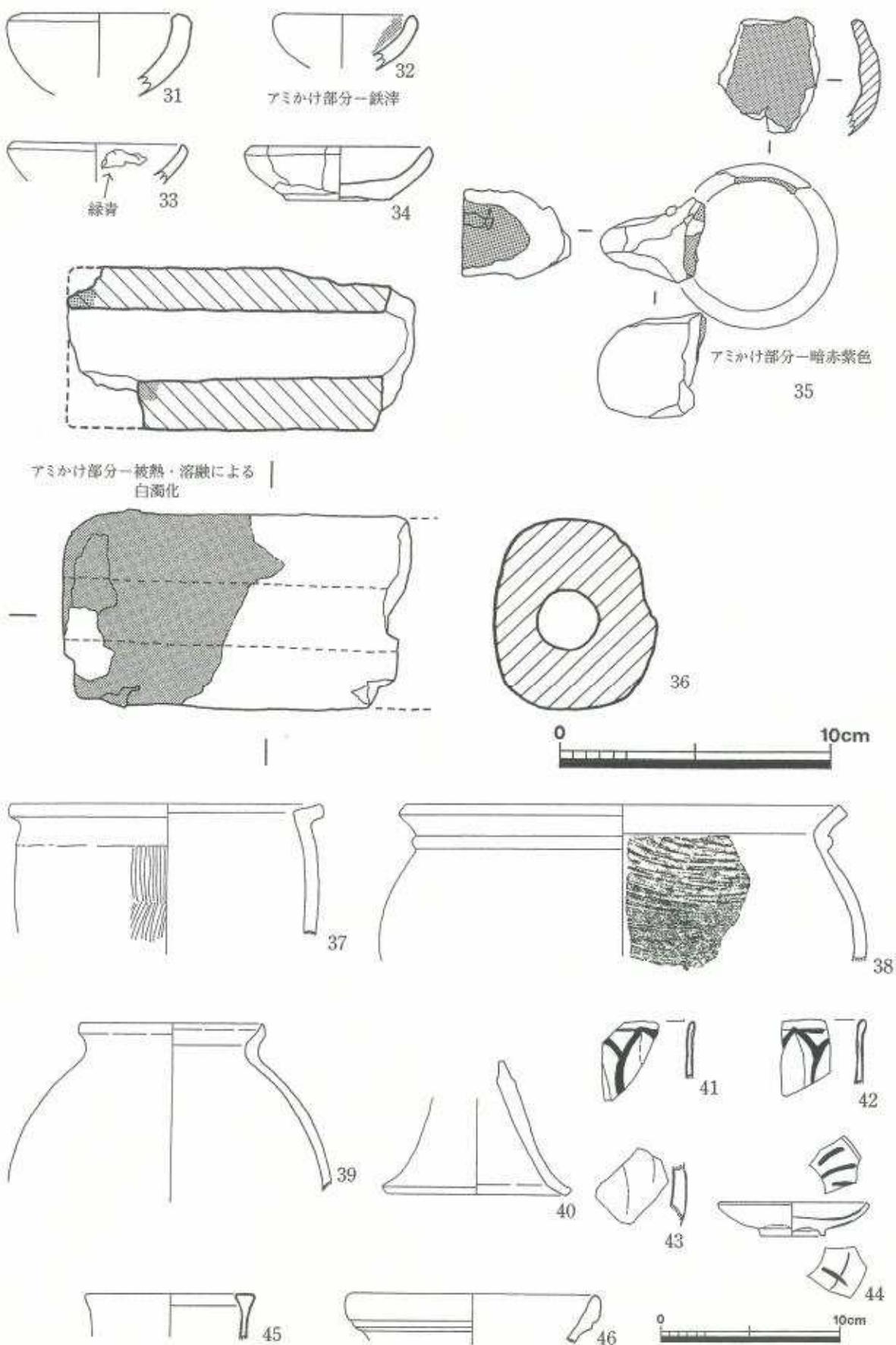
第30図 木製品実測図③ (S-1/4)



第31図 その他の遺物実測図① (S-1/2)

第32図 その他の遺物実測図② (S-1/3)





第33図 その他の遺物実測図③ (31~36はS-1/2、37~45はS-1/3)

第10表 木製品觀察表

第12表 その他の遺物観察表(2)

表11 第11表 その他の遺物観察表①

8. 表採遺物（第34図・図版11）

本遺跡の周辺では、現在でも陶磁器や瓦などが採集できる。特に、土地改良事業によって掘削された水路部分では、陶器や瓦などの大き目の破片が採集されている。ここでは今回の調査以前に採集された資料について紹介をしたい。なお、これらの資料は諫早市郷土館に保管し、一部を展示している。

1は軒丸瓦。三巴文と珠文を有する。三巴文は頭部の先端が尖り、接している。また、頭から尾へはくびれがなく、なだらかに移行する。頭部は丸く盛り上がる。尾は長く、互いに接しており、圓線状となる。断面は丸い。珠文の数は21個。文様はシャープであり、整った印象を受ける。外区は幅が狭く、高い。外区の内側は丸い。丸瓦との接合部はナデの痕跡が顯著である。内面には布目が残る。瓦当面径15.7cm、文様区径11.5cm、瓦当面厚2cm。色調は灰白～灰黒色。前回の調査でも同様の形態の巴文をもつ瓦が出土しているが、これと比べると、珠文の数が多く、文様構成もしっかりしており、古く位置づけられるのではないかと思われる。

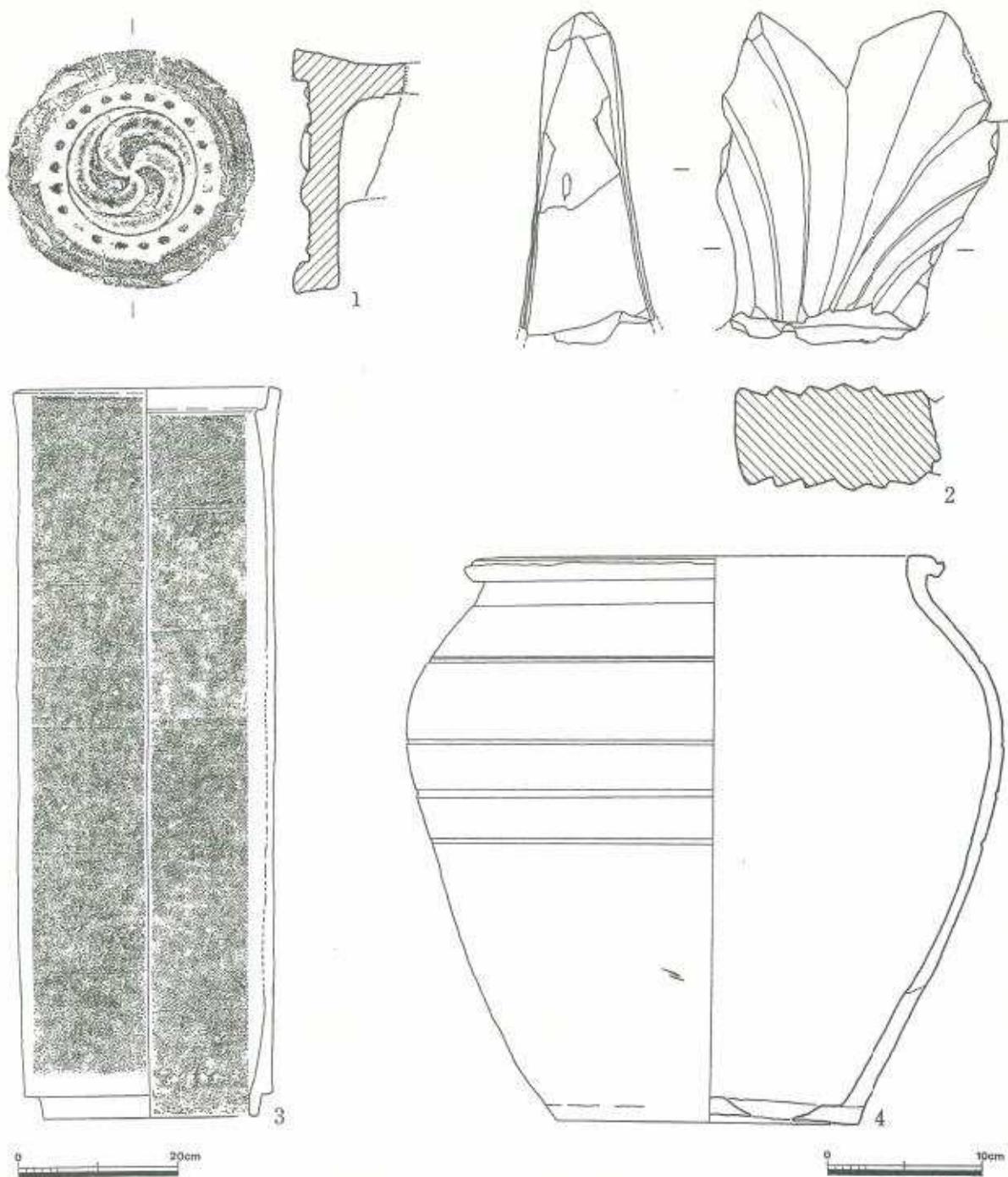
2は飾り瓦（鰐瓦）で、しゃちはこの尾の部分にあたると思われる。下方から図の左側面に向かって接続のための穴が開けられている。色調は白～灰白色を基調とし、部分的に灰色を呈している。残存長21cm。

3は瓦質の土管ではないかと思われるが、立った状態で出土したという点を考慮すれば、井戸枠の可能性もある。全長93cmの完形資料である。両端は接続するために、はめ込み式となっている。図の上側で径34cm・内面有段部の径30cm、下側で最大径31.2cm、内面径27.6cmである。胴部中位径は32.4cmであり、形状としては図の下から上へと緩やかに外反する器形となっている。調整は内外ともにハケである。内面は左上がりのハケで部位によって細かいハケ目を有する部分と粗いハケ目を有する部分が見られる。上方は端部及び接続部内面にもハケ目を有する。外面は下方、内面にも黒斑が見られる。色調は灰色。胎土には石英粒・白雲母を含み、ややザラついた感じを受ける。

この資料は久保秀治氏より諫早市郷土館に寄贈されたものであるが、他に同手法の土管が保管されている。この手の土管は管見に触れる例が少ないものの、瓦器井筒として報告された例が河内・摂津例として僅かに存在する（註）。

4は古唐津の壺。口径31～32cm、底径19.7～20cm、器高38.3cm、胴部最大径36cm。灰釉総掛。焼成時の貝目（10個か）を残す。重ね焼きされており、口縁端部は上の陶器の重量でへタっている。底板の上に粘土紐を積み上げ、タタキ成形と思われるが、内外面ともにていねいにナデ消しているため、痕跡は見られない。底部に底外からの打ち欠きによる穿孔があり、骨蔵器に転用されたものである。採集者は故稲田三千年氏であり、採集地点はA区、B区を画する東西溝の法面からの出土と聴取した。

註 菅原正明 1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』
(国立歴史民俗博物館)



第34図 表採遺物実測図 (3はS-1/8、他はS-1/4)

第IV章 まとめ

本章では、今回の調査で出土した遺物及び検出された遺構について、若干の考察を試みる。

遺物について

まず陶器については、胎土目（第18図21～23）、青海波タタキ（第19図29、30）、鉄絵（第18図12～15）、貝目（19図32、36・20図41）などは大橋Ⅰ期（1580～1610）（註1）に特徴的な要素である。

次に磁器については、輸入製品で占められていることから、全般的な所属時期は国産磁器焼成（1610年前後）以前の時期であることが考えられる。他遺跡での類例を見ると、（21図1）は平戸和蘭商館跡D層（註2）に見られ、下限は1618年である。（22図25）は1600～1610年に位置付けられている（註3）。（22図26）の種の青花碗は大阪城Ⅳ期、豊臣氏大阪城期後半出土遺物SK596（註4図面88-2823）、平戸和蘭商館跡884地区第3層（註6）などで見られ、前者では1598～1615年、後者では16C後半の年代が付与されている。（22図33）の褐地白花碗は平戸和蘭商館跡に出土例がある（註5・景德鎮1600～1610年）。

また、本遺跡では小野編年染付皿C群（碁笥底）が欠如していることも一つの指標となるであろう。皿C群は県内各地の城跡からの出土例が知られており、年代としては大略15世紀後半～16世紀中頃の年代が付与されている。坂口館跡（註6）では、D-7トレンチから出土しており、16世紀後半に、日野江城跡（註7）では、13トレンチより出土し、15～16世紀（日野江第Ⅱ期）に、原城跡（註8）では本丸跡の21トレンチからの出土で16世紀後半にそれぞれ比定されている。また、井手平城（註9）では1586（天正14年）の落城に伴う一括遺物の中に皿C群が看取される。これらの調査では、皿C群については16世紀後半の年代が想定されている。

一方、当遺跡を振り返ってみると、この皿C群が見当たらないのであり、遺物の面からの年代観としては、少なくとも1586年以降（西郷氏以降）であることが理解される。

次に土師質土器については、本遺跡Ⅱ類に見られる中皿の分化現象に時期的な特徴を見出すことができる。

本遺跡のⅡa類は林ノ辻遺跡（註10）の中世土壤墓出土品と系譜を一にし、また坂口館跡の杯I類及びII類（註6）は、本遺跡Ⅱb、IIIb類に比定可能であり、また小皿I類～IV類も本遺跡Ⅱa類に共通の要素を見出せる。さらに、日野江城跡（37P19図）にも同系統の杯、皿が認められ、これらの遺跡相互に系統的なつながりが認められ、ほぼ同時期（註11）であることの証左であると考えられる。しかし、本遺跡出土のⅡa～c類（中皿）を坂口館跡などでは欠くことに時期差が認められるのである。坂口館跡（註6）では法量について、大小の2群に分布し、日野江城（註7）では法量はほぼ一個所に集中する傾向があるので対し、当遺跡では、I～III類の3種に分類が可能であり、中皿の分化現象が認められる。このことは中川信作が説くように（註12）、16世紀後半の様相と考えられ、その推移を考えると坂口館跡が本遺跡より

先行することが考えられる。

以上のことから、林ノ辻遺跡中世土壙墓出土遺物⇒坂口館跡・日野江城出土遺物⇒本遺跡出土遺物の推移が考えられる。時期としては16世紀後半の年代が付与される。

瓦や瓦質土器に関しては、陶磁器との共伴関係や他遺跡での出土例などから、ほぼ同時期と考えられる。

遺物の年代観としては16世紀後半～17世紀初頭で押さえられることが理解された。しかし、皿C群の欠如をどう評価するかについては、本報告において、最も理解に苦慮する点、かつ城の成立年代に係わる重要な点であると思われる。①調査範囲が限られているためにたまたま確認できていない、②実際ない、という二通りの解釈の仕方があるだろう。しかし、①については、平成7年度の県教委の調査でも確認されていないことを見れば、この解釈については多少無理があると思われる。西郷氏が築いた城であれば当然皿C群の出土があつてしかるべきと思われるが、これがないとすると、当遺跡が皿C群の消滅後に築かれたとするか、15世紀の前半(皿C群の出現以前)に築かれ、皿C群の存続時期の期間、使用されなかつたとみるべきかとなる。15世紀前半の遺物がないことから、後者の方は考えにくい。前者の場合、その時期は16世紀最終段階となり、これまで西郷氏が築いた城であるといわれていたこととの間に矛盾が生じ、この説自体について見直す必要があると考えられる。もともと、この説は『諫早市史』から出ているものであるが、説の根拠自体が不明確で、話だけが一人歩きしている感も否めない。青磁(13世紀末～14世紀初)・白磁(11世紀後半～12世紀前半)・石鍋(12世紀後半～13世紀前半)が出土しているので、当地が西郷氏の入部以前から何らかの利用がされていたことは想像するに難くないが「城」としての利用を始めたのがはたして本当に西郷氏であるのかについては、再考・検討の余地があるのかもしれない。少なくとも、出土遺物の面からは西郷氏築城説を積極的に支持する根拠には乏しいのではないかと思われる。

遺構について

1. 溝状遺構について

今回の調査では4条の溝状遺構を検出した。いずれも空中写真(巻頭)や字図(第12図)に見られる旧地形に対応する方向と位置で確認され、沖城が城の内外を隔てる区画(隣接して「大堀端」の小字名があり、防護施設としての「堀」とすべきかとも思われるが、水路としての「溝」の機能も想定され、今回は便宜的に「溝状遺構」とした)を伴っていたことが確認された。

城を囲んでいた溝の西限はC-6溝で、南限はA-8～C-9溝が該当すると思われ、小字名「城畠」の範囲と重なる。この溝は、空中写真や地図では、東側に痕跡が見えないので、「コの字形」の区画となっている。「城畠」に接する「六左衛門籠」・「二丁籠」が17世紀代の干拓地と考えられ、城が築かれた時にはこの地が、岬状に突き出た地形であった事を考慮すれば、陸続きの西側・南側に防護のための溝をめぐらせ、東側については海という地形を利用し

たため、溝を作る必要がなかったのではないかとも思われる。

検出された溝は遺物の混入から考えて、昭和37年からの土地改良事業まで、水路として引き続き利用されていたと思われるが、B-1～D-1溝については、同時期の遺物のみが堆積していること、昭和22年撮影時の空中写真や字図にも痕跡がないことから、早い段階で埋没していたのではないかと思われる。その時期は遺物の年代から、16世紀末～17世紀初頭であろう。

それでは城の本体はどれくらいの規模を有していたのであろうか。水藤真は地籍図から城の区域を見出そうとした（註13）。これを応用すると、「城畠」では溝と海とで区画される部分に、周囲が田であるのに対し畠が集まった鍵形の部分（アミかけ部分）が存在する（第12図）。このプランは城下図や古地図（第1図）あるいは空中写真に見出すことができるが、この鍵形のプランが、城の本体と思われる。また、「大沖道下」では正方形プランの周囲をさらに正方形の水田（堀か？）が巡っているというやや奇異な状況がある。ここにも「城畠」と同様の高まりがあったとのことであり、城本体に係わる施設を伴っていたのかもしれない。ちなみに、アミかけ部分の規模については、「城畠」で突出部が30×20m、他が90×60mほど、「大沖道下」で一辺が40mほどで、明治22年地価修正時の土地台帳をもとに算出した面積は、前者で7,680m²、後者が1,700m²ほどである。

2. 鋳造関連土壙群

B-1において複数の土壙が検出された。このうち、B-1-Cでは、輪羽口や被熱した砂岩塊、粘土塊、砂、炉の部材が、また、この周囲から埴堀や砥石が出土した。遺物の内容から、今回検出された複数の土壙は「鋳造」に関連する遺構であると考えられる。したがって、本報告では一括して「鋳造関連土壙群」とした。

鋳造関連遺構では、これを構成する要素として、炉・鋳造土壙（遺構の「主」となる部分）・倉庫・廃棄壙・区画溝・貯蔵施設（生産に付随する「従」的な部分）がセットで出土することが事例としてみられる。

これらの面的な広がりが捉えられている例として、太宰府市の鉢ノ浦遺跡（13世紀後半～14世紀前半・註14）がある。溝で区画された複数のブロックごとに、鋳造土壙・掘立柱建物・井戸・炉・廃棄壙がセットになって検出されている。日置荘遺跡（13世紀・註15）では、前述した遺構の他に建物跡が検出され、生活域と作業場が溝で区画され、作業場では複数の倉庫が鋳造遺構をとりまいていた可能性が指摘されている。

当遺跡を振り返ってみると、B-1-Cでは、（調査区外に及んでいる可能性もあり）全体的な規模については不明であるが、内部に4本（含ぬきあと）と外部に1本の計5本の柱を有している。柱相互の間隔は1.5～1.6mとほぼ等間隔で一連のものと考えられる。B-1-Cは前述した遺物の内容や構造物を伴うことからみて、他の土壙（積極的な機能性を見出すことができないため、廃棄壙とした）との間に明確な差異が見られる。しかし、炉や鋳造土壙に見られる、焼土や被熱の痕跡、また鋳型の出土がないことから「主」あるいは中心的な遺構であると

の積極的な理由に乏しい。よって、この遺構は倉庫あるいは貯蔵施設と想定したい。また、B-1-Aは溝状を呈するが、これは工房内での区画の意味があると想定する。そして、B-1～D-1溝については、B-3～B-4では（橋脚との想定をしたが）柱列が検出されており生活域との区画としての機能も考えておきたい。

調査範囲が限られているため面的な様相はつかめず、炉・鋳造土壌の確認こそできなかったが、一定の面積を占める工房的な様相が想像しうる。そして、この土壌群は城の内部（城本体の南限はA-8～C-9、城域としてはB-5～D-4か）に取り込まれる形をとっていたであろう（註14）。

「城畠」・「大堀端」などの小字名や古地図から、当地では西郷氏によって築かれた支城の存在が予測されていた。前回の県教委の調査では、城の存在が主に遺物の年代の面から裏付けされた。今回の調査では遺物の面に加えて、城に伴う遺構が検出されたことは大きな成果であった。すなわち、城の周囲を溝で区画し、城域に生産関連施設を取り込んでいたということが遺構として視覚的に確認され、従来遺物の面からしか語る事ができなかつた部分を補うことができた。しかし、「城」として利用されたのがいつからなのかという点に関しては、従来西郷氏の支城と言っていたものの、少なくとも遺物の面からはこれを積極的に支持する資料は見られない。また、B-1～D-1溝に見られたように、城に伴う施設がある一時期に廃絶された可能性があり、この時期に「城」としての機能は失われた可能性がある。ただし、17世紀後半の遺物が出土していることから、「城」以外の目的で使用されていたことは確かである。

当該地区は開発の波に晒されつつあり、近い将来調査の機会が訪れることが十分予測される。城に伴う遺物・遺構は、水田下にまだまだ眠っている状態であり、今後の調査でさらに多くの資料を提示できるのではないかと思われる。

- 註1 大橋康二 2000 「Ⅰ 九州陶磁概論」「九州陶磁の編年」（九州近世陶磁学会）
- 註2 加藤有重 1988 「平戸和蘭商館跡」（平戸市の文化財25 平戸市教育委員会）
- 註3 加藤有重 1992 「平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ」（平戸市の文化財34 平戸市教育委員会）
- 註4 森毅 1992 「難波宮址の研究第9」（財団法人大阪市文化財協会）
- 註5 加藤有重 1993 「平戸和蘭商館跡の発掘Ⅳ」（平戸市の文化財35 平戸市教育委員会）
- 註6 宮崎貴夫 1991 「坂口館跡」（九州横断自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ 長崎県文化財調査報告書第99集 長崎県教育委員会）
- 註7 木村岳士 1998 「日野江城跡」（北有馬町文化財調査報告書第2集 北有馬町教育委員会）
- 註8 松本慎二 1996 「原城跡」（南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会）
- 註9 久村貞男 2000 「井手平城発掘調査報告書」（平成11年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書 佐世保市教育委員会）
- 註10 秀島貞康 1983 「林ノ辻遺跡」（諫早市文化財調査報告書第4集 諫早市教育委員会）

註11 [Fig. 51-7が建物S B 1のD 2区ピット5から出土しており、宮崎氏は、輸入陶磁器など他の遺物構成から16世紀（後半）代を想定している。また時期の特定が可能なSK 1・2の所属時期も文禄元（1592）年の火災による日本語学校の焼失との関係から整理・廃棄土壌の機能を想定しており妥当と思われる。]（文献・註6）

註12 中川信作 1988 「大阪城の石山本願寺期から豊臣氏大阪城期にかけての国産陶磁器」p 244

『大阪城跡Ⅲ』（財団法人大阪市文化財協会）

〔氏は「小皿が減少し、中皿に統一されるのは16世紀後半の様相と思われる。この時期の灯明皿が中皿に多いこともうなづける。しかし、中皿でもススの付着しないものも多く、17世紀以後の土師器皿の大部分が灯明用に使用されていることに比べると、16世紀代は灯明用以外に食器など多くの用途を持っていたことが考えられる」としている。〕

註13 水藤真 1989 「村や町を囲うこと」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』（国立歴史民俗博物館）

註14 銀柄俊夫 1993 「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告第48集』

（国立歴史民俗博物館）

〔ところが、10～11世紀頃には（中略）鋳造工人による同業集落とも言える状況が生まれ、（中略）そして遅くとも16世紀には、再び城館の内部にとりこまれる形と都市民として生業を維持する形に2分する状況がうかがえる（Ⅲ期）。〕

図 版



遺跡近景（西から）



C-6
溝状遺構検出状況（北から）



A-8
溝状遺構・道路遺構
検出状況（東から）



道路遺構

C-9
溝状遺構・道路遺構
検出状況(南から)



B-1
溝状遺構埋没状況(西から)



B-1
溝状遺構検出状況(西から)



B-5
溝状遺構検出状況(南から)



D-4
溝状遺構検出状況(西から)



B-1
鋳造関連土壤群全景
(左側奥は溝状遺構・北から)



B-1
铸造関連土壙群全景(南から)



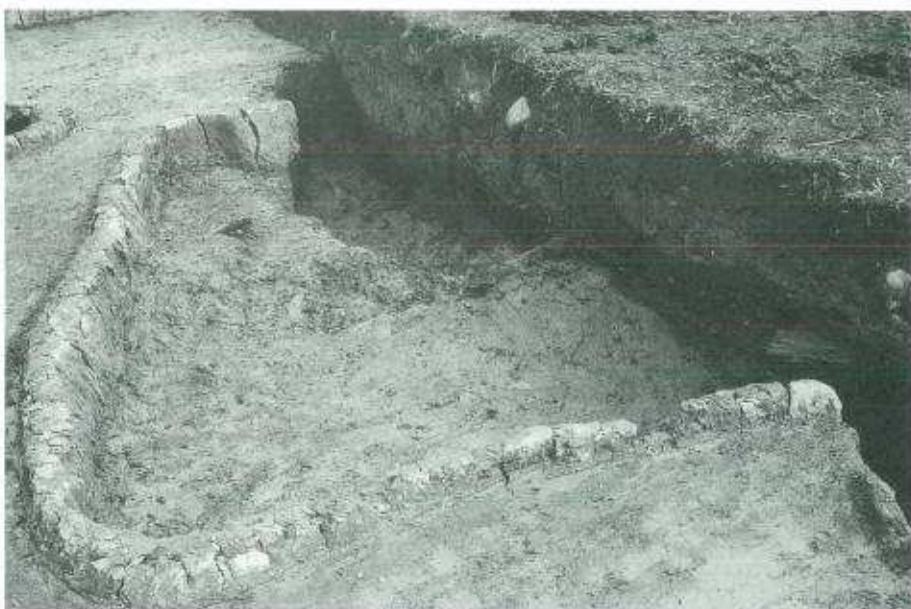
B-1-A
遺物出土状況(東から)



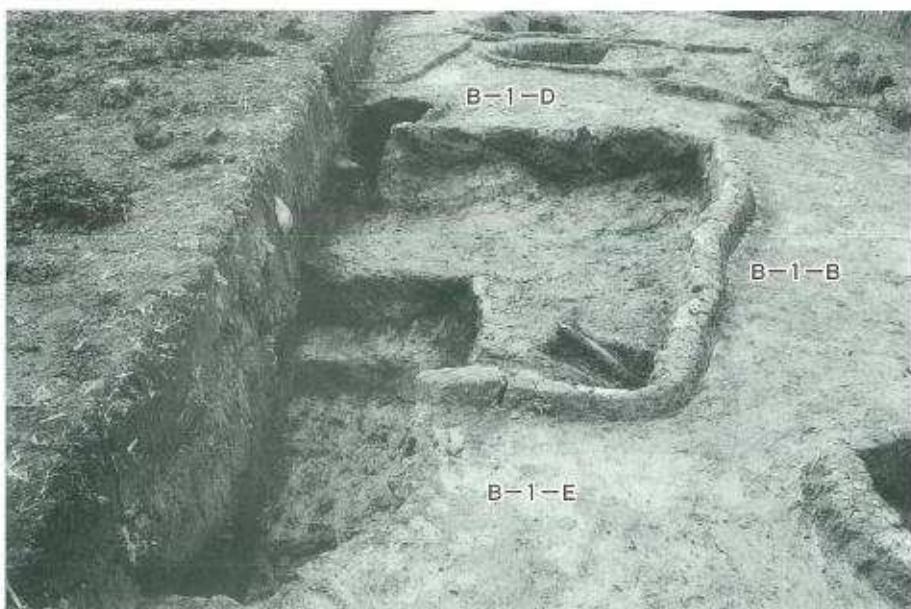
B-1-A
検出状況(西から)



B-1-B
遺物出土状況(南から)



B-1-B
検出状況①(南から)



B-1-B
検出状況②(北から)



B-1-C
覆土堆積状況(北から)



B-1-C
検出状況①(北から)



B-1-C
検出状況②(西から)



B-1-D
検出状況(西から)

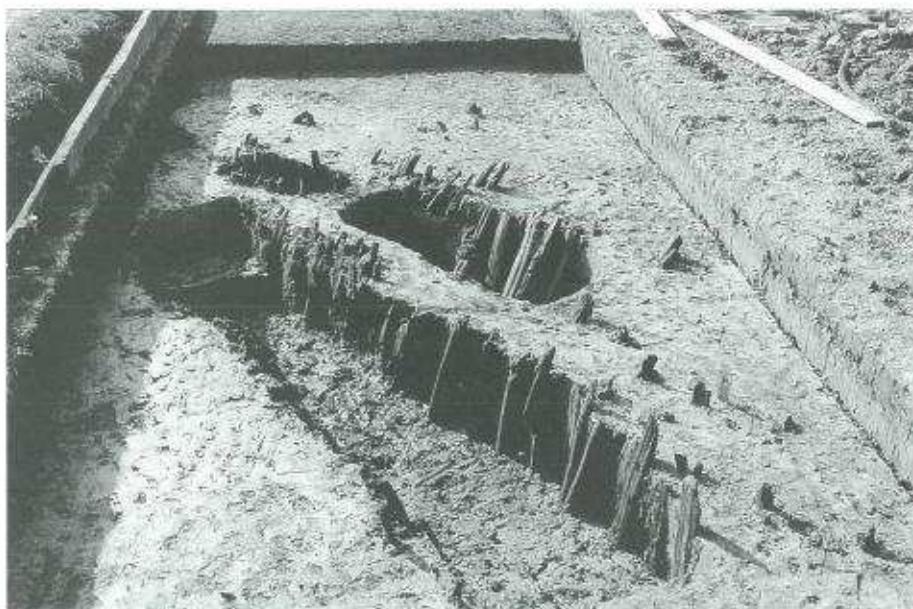


D-2
廃棄場検出状況(東から)



B-3～B-4
柱列検出状況(南から)

図版 8



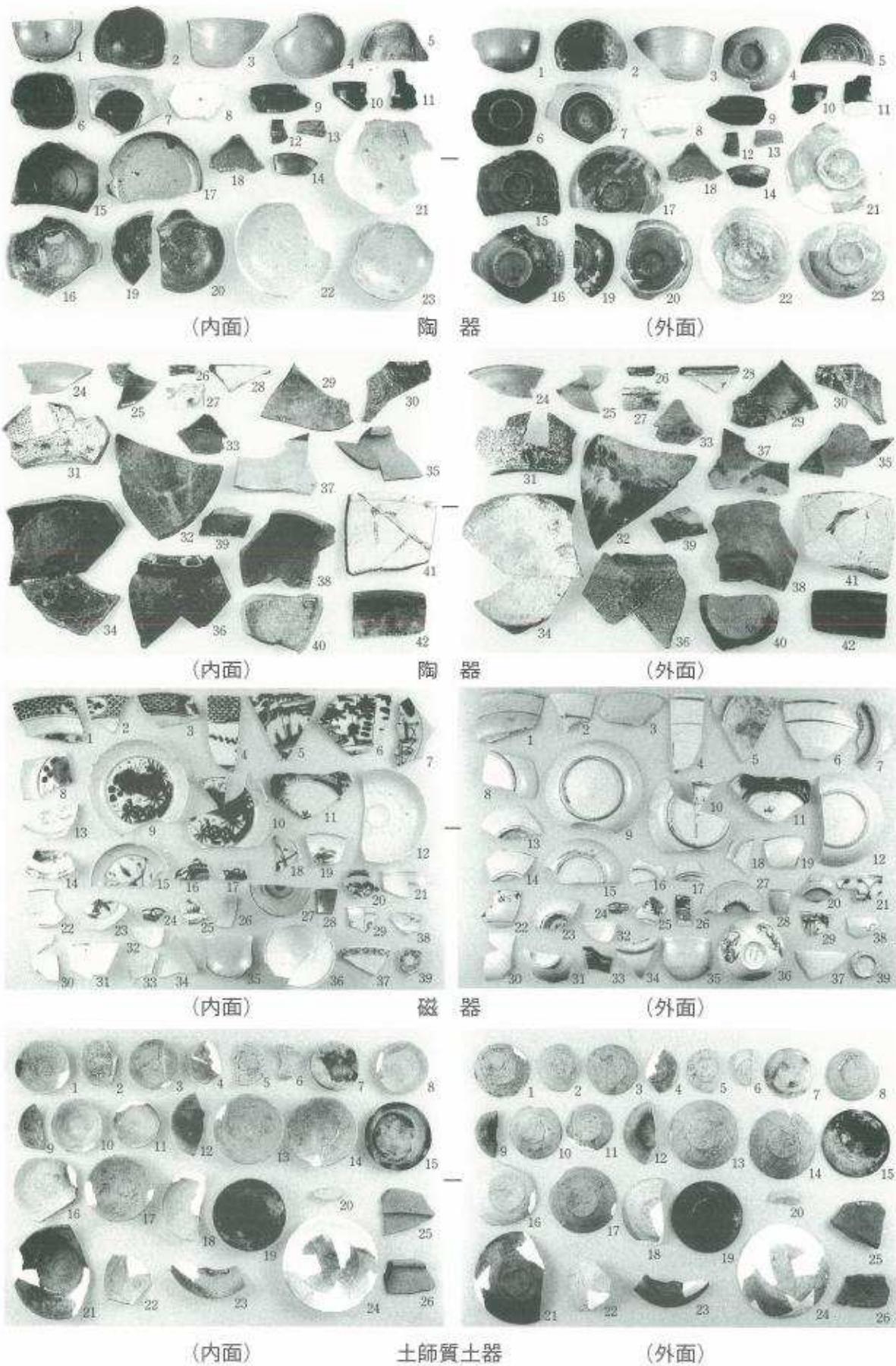
D-7
杭列検出状況(北から)

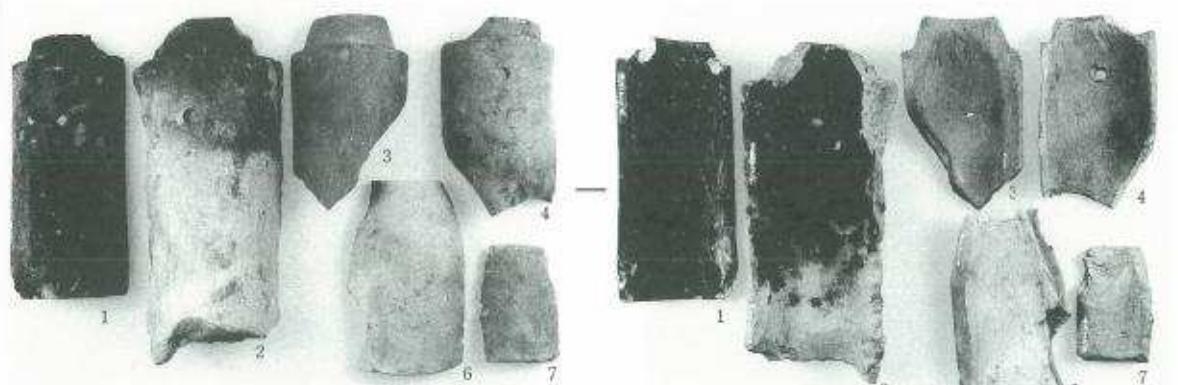


遺物出土状況①



遺物出土状況②

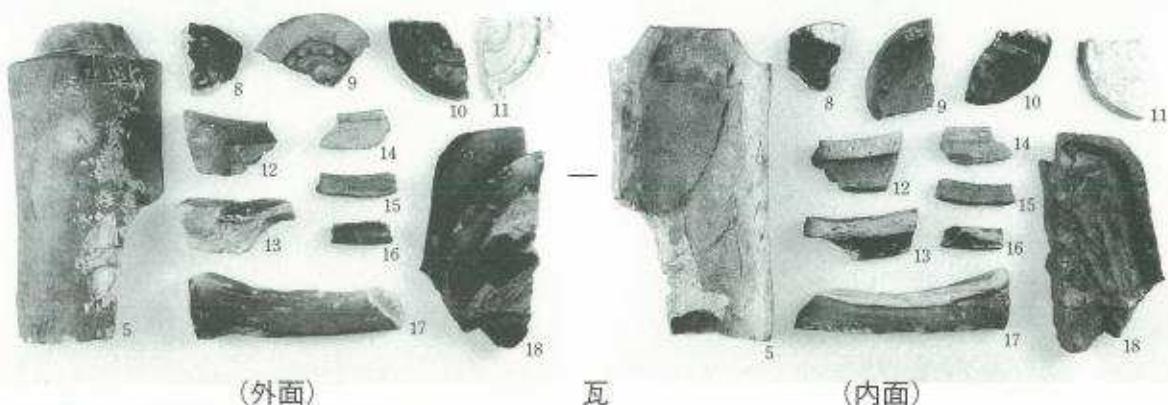




(外面)

瓦

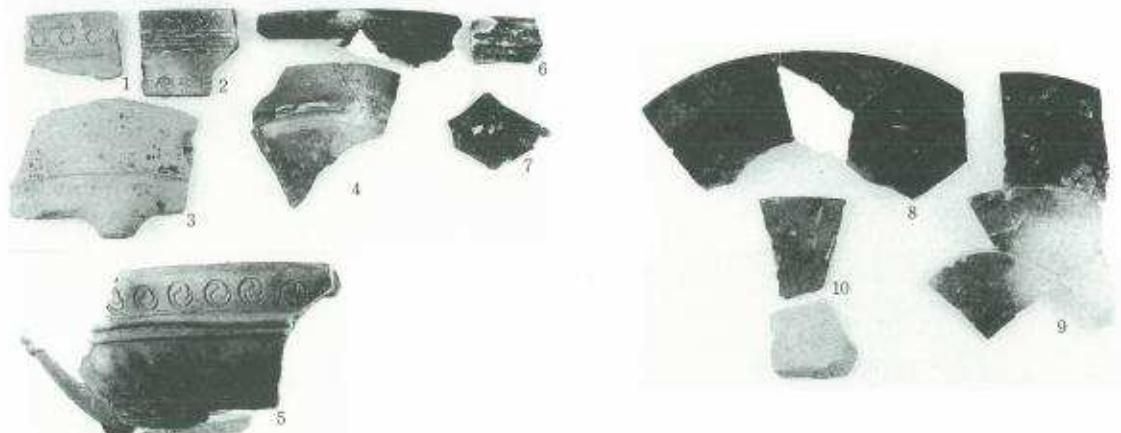
(内面)



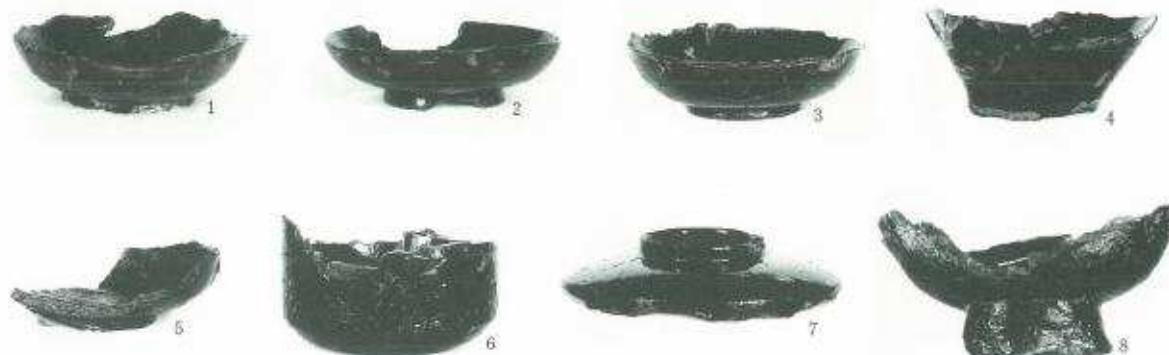
(外面)

瓦

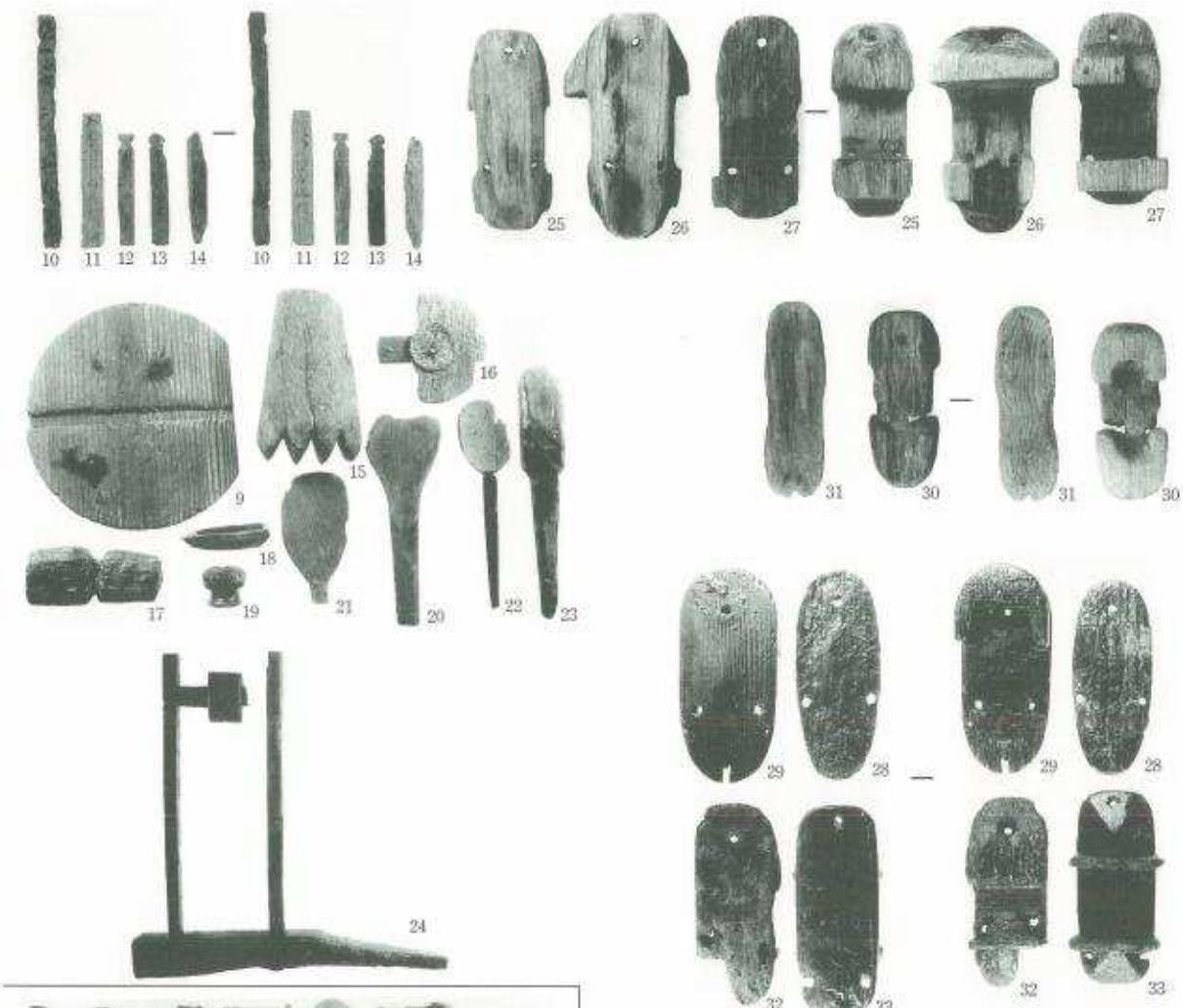
(内面)



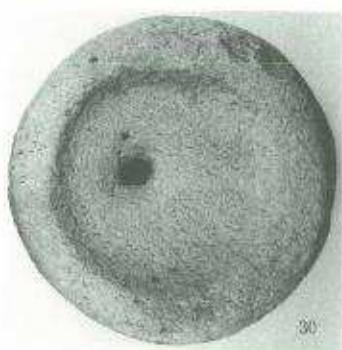
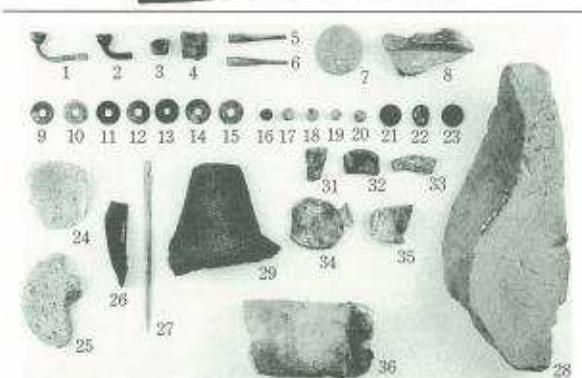
瓦質土器



木製品



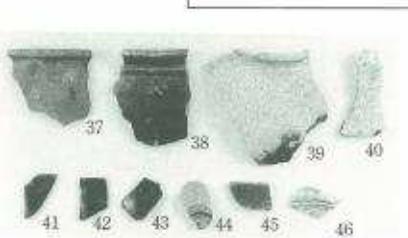
木製品



その他の遺物



表採遺物



諫早市文化財調査報告書 第14集

沖 城 跡

2000. 3. 31

発行 諫早市教育委員会
〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号
TEL (0957) 22-1500

印刷 真光社印刷
〒854-0011 長崎県諫早市八天町4番25号
TEL (0957) 22-0470